

十二月廿五日

大森武介様

尚々何寄之御着澤山に被成下忝賞翫仕候

(鈴木敬二所藏)

黒住 左京

三〇

三三三 向暑之節に御座候處彌御揃御堅剛に被成御坐奉珍壽候先
 日者御出府被成候由色々間違にて得御目に不懸御殘多に
 奉存候尤廿三日に岡本屋へ御尋に参り候處其朝御歸り被
 成候由猶々殘念に奉存候廿四日には是悲^非く参上と奉存
 候處不斗足痛^痛にて心外に得参上不仕候未步行六ヶ敷難義
 仕候しかし少之事に者御坐候御聞も被下候哉近頃者誠に
 八方へ開候哉難有者候得共餘りはけ敷相成却而迷惑仕候

夫故申分無御座御無音仕候此段御斷申上候
 一先達而尾上之事御尋被成其後段々聞合候處至極何か宜
 敷様子に御座候此上者御熟談被爲成候而も宜哉に奉存候
 何事も拜顔にて御咄申上度と奉存候先者此度御無沙汰御
 斷右御左右旁々如斯御坐候恐々

五月廿七日

黒住 左京

大森武介様

尚々乍末皆々様へ宜敷御傳聲奉頼上候

(宗家所藏)

三三四

大森武介様

黒住 左京

要用

三一

夜前者拜顔仕大慶不少奉存候然者吟次承り候得は小子家本之義に付誠に廣大成思召難有共忝とも御禮難申盡御事に奉存候何か御禮旁々來月三日に者參上可申候積り奉存候委敷者參上にて萬々御禮可申上候いつも急用事斗如斯御坐候以上

九月十九日

(船木甚兵衛所藏)

二三五 先月十六日出尊札同廿八日に相達し忝奉拜見候先以

尊君様彌御機けんよく御出務被成候由目出度奉恐壽候近頃は御服痛もさつはり被成候由扱御一心奉感候しかし何事も御物入多と承り御尤と奉存候何事も御内ばに被

成候か宜敷と奉存候隨而當地御留主皆様右御連中小子不殘御同意に相暮居申候此段御安意可被遣候追付龜次も罷歸り候間御様子承度と相樂居申候石尾も早御登り御座候間萬事御聞可被爲下候折節大急き大亂筆眞平御免可被爲下候恐惶謹言

九月二日

黒住 左京

一 森 様

尙々時氣御厭ひ可被遊候

(船木甚兵衛所藏)

一 森 彦 六 郎 様

黒住 左京

要用無事

一筆啓上仕候未殘暑難退御座候處彌御機嫌能御勤被遊候
由奉恐賀候隨而當地尊館御二方様彌御六間敷益御機嫌能
被成御坐御次に小子義も不相替世話敷東西へ馳廻り候得
共御影かつかれも不仕日夜難有面面白く相暮居申候乍恐尊意
易思召可被爲下候毎度御細書被成下難有奉感拜候誠に御
歸りも今少に相成候積る御咄可申上と夫のみ相樂奉待上
候甚急荒々斯如此御座候恐惶謹言
(船木甚兵衛所藏)

三三七 一筆啓上仕候時分柄得程冷氣彌増に相成候處彌御機嫌能
御勤被遊恐悦至極に奉存候毎度御細書被成下難有奉拜見
候御次に爰元尊館御六間敷益御機嫌よく被成御座御次に

小子も彌世話敷難有日々はせ廻り居申候此段御尊意易思
召可被爲下候儲御歸りも少々御延に相成御殘多に奉存候
しかし彼是申内直に御歸り相成候石田様には早御歸りに
相成候間何か御尋申上候と相樂居申候何か申上度御事は
澤山御座候得とも早直に御歸被遊候間積る御咄申上度奉
樂待上候先は尊荅迄如斯御座候恐惶謹言

九月二日出

黒住 左京

一森彦六郎様

(花押)
(船木甚兵衛所藏)

三三八 今月三日出尊札同十五日に相達難有奉拜見候彌御機嫌能
御勤被遊候由恐悦至極に奉存候隨而當地尊家御二方様御

機嫌よく御六間敷被成御座御次に小子義も日々難有相暮居申候乍恐此段御安意可被爲下候何かと申内御歸りも誠に今少に相成候間積る御咄申上度と夫のみ相樂み奉待上候今日者日待こしらへ甚世話敷最早御文通も此度者は切と奉存候間誠に一筆申上候早々恐惶謹言

九月十五日

黒住 左京

一森彦六郎様

尙々次第に冷氣彌増に御座候間随分御道中御用捨被爲成早々御歸可被遊候積る御咄可申上と奉待上候以上

(船木甚兵衛所藏)

三三九先月十六日出之尊札同廿六日に相達拜見仕候益御機けん

よく御出勤被爲成候由珍重不斜御事に奉存候先月廿四日又市も無滞着仕尊君様御様子委敷承奉感心候誠に近來者^{のみ}度々御申越し被遣候趣毎度く奉感心候隨而爰元尊家皆様御機けんよく被成御座次に小子御同意に相暮居申候此段御尊意易思召可被下候最早石尾御氏も御着府被成候哉と奉遠察候何か之様子御聞可被遣候爲指御事も御座なく候得共右尊答迄如斯御座候恐惶謹言

十月二日

黒住 左京

一森彦六郎様

尙々次第寒に相成候間萬事御用捨專一と可被遊候以上

(船木甚兵衛所藏)

尊苔

拜見仕候如仰甚寒に御坐候所尊家にも皆様御機嫌能被成御座奉珍重候然者少々御心配之義出来仕候由早速御見廻申上度候處御無音申上候御日待之義者承知仕候しかし廿三日之處外様と御相談にて御定被成候處御本意と奉存候今夕七島右御連士様御出被成候は、御咄も可申上候廿五日之所於小子は如何様共可仕候委敷尊苔にて可申上候先は尊苔迄如斯御座候不具

壬 十一月十八日

追而申上候今本文相調候處相考へ候得は廿三日は慥に青地御氏御日待之様に覺申候廿五日に被成候は、先故障は

無御座と奉存候以上

(船木甚兵衛所藏)

三三 先月十六日出尊札相達し難有奉拜見候彌御機嫌能御勤被遊恐悦至極に奉存候隨而當地 尊館御二方様とも彌以御六間敷殊に御機嫌能被成御座是又恐悦に奉存候御次に小子近來者益世話敷罷成難有日々相暮居申候乍恐尊意安く思召可被爲下候御歸りも誠今少に相成御きをい可被遊と相樂奉待上候最早御手紙指上候も是切と奉存候何事も御歸り被遊候上積る御咄可申上甚急大亂筆御請迄文面前後御推覽可被爲下候恐惶謹言

八月二日出

黒住 左京

一森彦六郎様

尚々今少之暑さ御用捨專一に可被遊候以上

(船木甚兵衛所藏)

三〇

三日出尊書同十三日に相達し難有奉拜見候如仰改年之御慶目出度申納候先以御機嫌能御迎陽被遊候由奉恐壽候隨而當地 尊家皆々様御機けんよく被成御座御次に小子皆皆御同様に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候誠に日々御歸國も近寄嚙々御きをひ被遊候哉と樂奉待候此度者日待こしらへに甚世話敷御座候間右尊答迄如此御座候恐惶謹言

正月十六日

黒住 左京

(花押)

一森彦六郎様

尚々餘寒も今少罷成候間諸事御用捨專一に可被遊候書外追々可申上候早々以上

(遠藤好治所藏)

先月十六日出之尊札相達し難有拜見仕候如仰得程暑に相成候所其御地 尊君様彌御機嫌能被成御出務候由奉恐壽候隨而當地尊家皆様御機けんよく被成御座目出度奉存候御次に小子皆々御同意に相暮居申候此段御尊慮易く思召可被爲下候乍末筆何か之御様子結構成御事と御申越被遊重々難有奉存候且御歸りも日々近寄何か御様子可承と相樂奉待候今日も甚急き用事斗如斯御座候恐惶謹言

三一

六月朔日調

黒住 左京

五二

一森彦六郎様

尙く次第に暑さに罷成候間萬事御用捨專一に奉存候以上

(船木甚兵衛所藏)

二三四 改年之御慶千里同風目出度申納候先以御機嫌能御越年被遊候哉と恐悦至極に奉存候隨而當地 尊家皆様御機嫌よく御嘉壽被遊奉恐賀候御次に小子も嘉^加年仕候乍恐御尊意易く思召可被爲下候且先達而者御風邪にて御難義被遊候由しかし最早御さつはり被遊候哉と奉存候去冬者誠に一統に不殘風邪にて御坐候隨分く御用捨可被遊候何かと

申内春に移り候間追々御歸國も近寄候迎も御文通にては難盡其内追々可申上候先者年始御祝詞迄猶期永春之時候恐惶謹言

一森彦六郎様

黒住 左京

尊答無異

(船木甚兵衛所藏)

二三五 一筆啓上仕候時分柄暖氣相催候處益御機嫌能御出務被爲成候由珍重不少御事奉存候隨而當地 尊家皆様御機嫌よく被成御座御次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御安意思召可被爲下候毎度御細書被遣難有奉拜見候誠に御歸國も今少に相成積る御咄申上度と奉樂待候折節指急尊

五三

三六
答迄如斯御座候恐惶謹言

三月十六日

黑住 左京

一森彦六郎様

尙々時候御厭ひ可被遊候早々以上

(船木甚兵衛所藏)

三七

略御尊免可被爲下候

一森彦六郎様

黑住 左京

要用無事

先月十一日出尊書相達奉拜見候彌御機嫌能被爲成御勤候
由珍壽不少御事奉存候隨而尊家皆様御機嫌よく成被御座
御次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐尊慮易く思召

可被爲下候最早御歸國も誠に今少に罷成候間何か委敷御
事は尊顔にて可申上候哉相樂奉待候右者尊答迄如斯御座
候恐惶謹言

三月二日

黑住 左京

一森彦六郎様

尙々今少之所彌御任被遊御機けんよく御道中可被遊候以
上

(倉光必明所藏)

三七 一筆啓上仕候先以甚暑之節に御座候得共其御地

尊君様益御機嫌能被成御出務候由奉珍重候隨而當地 尊
家皆様御次に小子義も御同意に相暮居申候乍恐御尊意安

く思召可被爲下候且道も先折合居申候しかし三之夕御小連に御座候得共殊之外宜敷御座候追付石尾氏御出被成候は、御聞可被成候先は毎度御念書被遣候御答迄如斯御座候恐惶謹言

六月二日

左京

彦六郎様

尙々時候御のこひ御出勤可被成候已上

(船木甚兵衛所藏)

二三八一筆啓上仕候向暑之節御座候所先以其御地 尊君様益御機嫌よく被成御出務候由珍重奉存候隨而當地御兩所様御機嫌よく被成御座候次に小子義も御同意相暮居申候此段

御尊意安く思召可被爲下候御地者如何に御座候哉當地は甚不順にて病人多にて困入申候諸事御用捨奉希候右者時候御見廻旁々如斯御座恐惶謹言

五月十六日出

黒住 左京

一森彦六郎様

(河本甚兵衛所藏)

二三九いよく御機嫌よく御入らせ遊はし御目出度そんし上り先日江戸狀相認便に上置候所江戶の御念書被遣其御請に御座候若未参り不申候得は宜敷二重に成も宜からず候ま、若御手本に御座候は、御引替下され候委敷は参上にて申上り先はあらくめて度と

九月二日

一森御留主様

黒住
(船木甚兵衛所藏)

二四〇

口上

一筆申上り候時分新から得程暑さに相成り候處新いよいよ御機けんよく被成御座目出度そんし奉り候扱先日は段段に結構成品色々御取揃遊はし御惠難有いたゞき申上候さて其節御札守御年不覺間違戊戊の御年を卯御年と調へ候様に跡にて相考へ候得はそんしられ候御断も無御事恐入居申候得共よく考へ候得は五十の卯も少の厄と承り候間是も自然と奉存候間両用共御用ひ被遊被遣候は難

有奉存候其中御直に御咄申上候先は右御禮御断旁々あら
あら筆を留候めて度

五月廿九日

黒住

一森様

尙く江戸御状參彌御機けんよく御出務被遊目出度奉存
候猶此手紙宜敷御達し可被爲下候願ひ上り

(船木甚兵衛所藏)

二四一 拜見仕申上候次第に御快氣被遊候よし恐悦にうんし上り
江戸より御状被遣難有拜し奉候彌御機けんよく被成御座
奉恐壽候かつ御珍敷御品二品御惠被爲遣難有賞翫仕候
一御神闔被仰則奉伺候所壹りうきんたんの方はあまりつ

よ過候哉不宜相見へ候こんけんたんの方も至而少つゝこも宜敷と奉存候是も澤山には不宜と奉存候其内委敷は参上萬々可申上候先は右御禮尊苔まで甚急あらゝめて度
しん

神無月廿八日

黒住

一 森 様

尊苔

(徳岡太平所藏)

二四二

一 森 様

黒住

先日は御苦勞奉存候且今日は江戸より御念書被遣難有拜見仕候外に一朱金二つお御初穂御備被成慥に神納仕候委

敷御目にかゝり御咄申上候先御受取迄如斯候めて度
しん

正月十四日

尙一御隠居様へ宜敷御頼申上候

(船木甚兵衛所藏)

二四三

一 森 様

黒住

彌御機嫌能被成御座めて度そんし奉り候明後者参上可申と御約束申上置候得共無據故障出来仕候間心外御断申上候且此手かみ夫々宜敷御頼申上りめて度
しん

菊月十六日

尙々十八日に七しまへは参り候間御すきも御座候は、御出可被遊候
しん

(船木甚兵衛所藏)

二四四 殘暑甚敷御座候處彌御機嫌能御勤被爲成目出度珍重奉存候次に爰元尊家御留主皆様益御機嫌よく被成御坐次に小子彌無異に相暮居申候乍憚御休意思召可被爲下候甚世談^話敷候まゝ度々御念書之御答も不仕候何分御歸も今少と奉存候積御咄可申上と樂居申候委敷は御親父様より申上られ候やと奉存候甚急き荒々如此御座候恐惶謹言

七月二日

右源二

乾介様

(船木甚兵衛所藏)

二四五 一筆啓上仕候先以其御地 尊君様益御機嫌能被爲成御坐奉恐壽候隨而御宿所にも御両方様益御勢ひ宜敷次に下拙も彌世談^話敷候得共無異義相暮居申乍惶御休意思召可被爲下候乍末先達而は少々御不快之御様子乍去此節は最早御平愈とは奉察候且此神府^符は此後若御不快御坐候は、其時は三度ほこに一流つ、御頂戴可被成候折節指急き御見舞迄如此御坐候恐々謹言

九月十五日極晩

右源二

乾介様

尙く則今夕日待にて御座候間宜敷祈念仕候以上

(船木甚兵衛所藏)

石尾乾介様

黒住 左京

尊館無異

略御高免可被爲下候

未春寒嚴敷御座候所先以其御地 尊君様益御機けんよく被成御出務候由奉恐壽候隨而當地尊家皆様御機けんよく次に小子皆々御同意に相暮居申候乍惶此段御休意可被爲下候誠に青地御氏も御歸國今少に相成候まゝ何か御左右承度と相樂居申候先日は書狀相調上候所間に合不申由夫故此度は至而一寸申上候恐惶謹言

二月十六日

宗 忠

乾 介 様

尙々時候御るこひ御出勤可被爲成候以上

(益尾徳次郎所懸)

二四七 先月十九日出之尊札相達奉拜見候先以其御地 尊君様益

御機嫌能被爲成御出務候由珍重不過之御事奉存候誠に先達而大に御無音申上甚恐入居申候打つゝき雨天にて諸々色々取沙汰御座候しかし御互に何之別条も無御坐難有御事に奉存候隨而尊家皆様御機嫌よく被成御座次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意安く思召可被爲下候何かと申内御歸國も今少に相成居申候つもる御咄申上度と相樂居申候且又脇指之事委敷御申越し被遣難有誠に御にやひ申ぬ事御頼申上大に御心配をかけ重々恐入申

候誠^ニに人の口つりにて迷ひ申にやと奉存候少もく不苦
誠^ニに御文面幾重もく恐入居申候又々以前之通りにさし
りやうにても仕候右者尊答迄如是に御座候恐惶謹言

八月十六日出

黒住 左京

石尾乾介様

尚々度々御被御越被遊難有相備へ御長久祈申上候以上

(益尼徳次郎所藏)

二四八

一筆啓上仕候先以秋冷彌(虫喰)其御地尊君様には(虫喰)候由
珍重に奉(虫喰)次に小子御同意に相暮御別条無(虫喰)様(虫喰)
思召可被成(虫喰)居申候乍(虫喰)思召可被爲(虫喰)
一若殿様には(虫喰)御坐候定而(虫喰)と申上候

様(虫喰)無御坐候小子共(虫喰)おゐても誠^ニに(虫喰)御坐

候御國におゐても(虫喰)末々に至迄不殘自然としめり居

申候定而尊君様(虫喰)奉遙察候(虫喰)所にて御遣ひ

可被成候一切之姿と申者は少も(虫喰)成者(虫喰)御坐候かく

(虫喰)我(虫喰)有(虫喰)明日は(虫喰)斗(虫喰)ゆへ(虫喰)執行

(虫喰)御座(虫喰)御嘆も御尤(虫喰)跡(虫喰)御歸り被遊事

奉存候最早(虫喰)却而近寄候間(虫喰)可申上候恐惶謹言

八月晦日認

黒住 左京

石尾乾介様

尚く此上(虫喰)御大切(虫喰)被遊候以上

石尾乾介様

(虫喰)

要用

(益尼徳次郎所藏)

FOR
(右の御書翰の傍註の中(花)を加へたるは角
南作吾筆寫の「花鳥風月」を引きしものなり)

二四九

略々御尊免可被爲下候

石尾乾介様

黒住 左京

要用無事

一筆啓上仕候時分柄暖氣彌増に御座候所先以其御地 尊
君様益御機けんよく被成御出勤候由奉恐壽候隨而當地尊
家皆様御機嫌能被成御坐御次に小子方皆々御同意相暮居
申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候誠に御歸國も今少に
相成申候定而御きをひ遊し候哉と奉存候小子義も當月末
か來月上旬迄に出立仕參宮仕度奉存候夫故最早御歸國迄

は文通申上候事も是切と奉存候何分にも御歸國上積る御
咄申上度と奉樂候先は御機嫌の奉伺候迄亂筆如斯御坐候
恐惶謹言

三月十六日

黒住 左京

石尾乾介様

尙々乍末御親父様彌御順快被遊恐悅奉存候以上

(鈴木敬二所藏)

二五〇 一筆啓上仕候先以秋冷彌増に御座候得共其御地尊君様益
御機嫌能被成御出務候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地
尊家皆様次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐尊慮安く
思召可被爲下候誠に月日之立候は夢と奉存候最早御歸國

FOR

今少に相成候間又々御直談仕度と相樂奉待候愚書指上候も此度斗と奉存候毎々御細書被遣難有猶又度々御被^被御越被遣朝暮御長久奉祈候此度は奉伺御機嫌迄追付御歸國に萬々可申上候恐惶謹言

九月二日出

黒住 左京

石尾乾介様

尙々次第冷氣相まじ候間萬事御用捨被遊御出務可被成候以上

(秋間賢孝所藏)

甚急略御尊免可被下候

石尾乾介様

黒住 左京

尊館

無異

先月十六日尊札早々相達し難有奉拜見候先以其御地尊君様御機嫌能被成御出務候由珍重奉存候隨而當地尊家皆様御次に小子皆々御同然に相暮居申候御尊意安く思召可被爲下候爲指御事も無御座候得共右尊答迄如斯御座候恐惶謹言

二月二日

宗 忠

石尾 様

尙々先便にも大小之事御申越し被遣難有猶宜敷奉頼上候誠に此度は甚大亂筆眞平御尊免可被爲下候以上

(三好金太郎所藏)

河本

丈八郎様

黒住 左京

貴答

拜見仕候然者御持病御はつし被成殊に痔出甚御難義被成
 候由就右に小子參上可仕候様御申越し被下甚難御堪奉存
 候得共當月先約つみ切心外に御斷申上候しかし此神府御
 戴き可被下候罷出印御座候程なら直に御かけ可有御座候
 小子義も誠に難有つらく御座候御察し可被下候此方にて
 宜敷御祈念可申上候甚急貴答迄亂筆如斯御座候以上

九月十二日

(森文吾所藏)

河本

丈八郎様

黒住 左京

貴答

拜見仕候日々嚴敷候處御堅康奉珍重候然者仰之趣承知仕
 候尤此間七日に御同人御出にて委細承り居申候隨分早々
 御快氣と奉存候此段御安心之所御申可被成候右貴答如是
 御座候以上

七月十日

追啓此口上書相認置候所へ御人被遣承り候得は先次第に
 御順快之由尙次第彌御快氣奉存此方にても日々祈願仕候

以上

(森文吾所藏)

二五四

河本

中野

丈八郎様

左京

貴答

不相替爲中元之御祝義に御國寶一封御備被成下難有幾久
敷神納仕候盃後參上御禮可申上候右御受取迄如此御座候
且御祈念之儀者承知仕候早々亂筆御推覽可被下候以上

七月九日

(森文吾所藏)

二五五

森 丈八郎様

黒住 左京

畧貴答

御紙面被下拜見仕候先日者遠方御入來忝奉存候已來彌御
安全被成御座珍重不過之奉存候然は十八日より參上可申
由被仰下兼而其つもり仕候間無間違參上可申候委細者罷
出萬々可申上候甚世話敷右御答迄早々以上

四月十六日

(森文吾所藏)

二五六 拜見仕候如仰打つゝき梅雨に御座候處彌御安全に被成御
座候由大慶に奉存候隨而小子方御同意に相暮此段御安意
可被下候然者山崎氏之御進物之義承知仕候早々相遣し可

二五六

申候委敷御事者得拜顔之萬々可申述候以上

五月十一日

左京

丈八郎様

尙々乍末皆様へ宜敷御傳聲奉頼候又々以上

(森文吾所藏)

二五七

又々申入候先達而者御出被下不相替御念被入忝仕合に
奉存候乍憚皆様へ宜御禮奉頼上候

拜見仕候如仰未殘暑嚴敷御座候處皆々様御健剛に被成御
座候由珍重不少御事に奉存候然者來る十八日の貴家中村
并御組合廻會被仰下承知仕候尤廿一日石黒氏同二日私宅
にて甚六々敷者御座候得共先此度者御組合斗へ參上仕追

而戸津野組へは罷出可申候折節世話敷右貴荅迄如此御座
候書外拜顔萬々可申述候以上

七月三日

黒住 左京

森 丈八郎様

尙々乍末皆々様へ時候御見廻宜御申上可被下候

(森文吾所藏)

二五八 時分柄冷氣彌増に御座候處彌御障も無御座珍重不少御事
に奉存候しかし先日者御賢父様御持病にて御難義被成候
由嘸々御心配と奉察候其節小子罷出候様御申越被成候處
御斷申上甚以御斷も無御座次第御座候乍去追々御順快被
成候由大慶に奉存候御祈念は宜敷申上候然る處來早々罷

出候様被仰越右に付小子會日之日割荒まし別紙に申上候
御覽可被下候近來彌はつし難有者奉存候得共御考辨可被
下候折節急甚亂文御推覽可被下候以上

九月廿五日

森 様

(森文吾所藏)

黒住

二五九

森御父子様

貴答

黒住 左京

拜見仕候先日者參上段々御取持被遣忝仕合奉存候已來彌
御揃御堅剛に被成御座珍重奉存候然者中田氏の之御別書
貴家様の御文面之趣承知者仕候得共此義者迪も熟談者不

仕と奉存候先達而も段々相進め候得共例之みくしにて中
中承知無御座夫故先日宮内へも氣毒なから右之趣申上置
候しかし御存寄之趣者申ては見候得共定て六ヶ敷と奉存
候甚急大亂筆眞平御免可被下候書外拜顔之節萬々可申述
候以上

七月廿五日

尚々乍末皆様へ宜敷御傳聲奉頼上候

(森文吾所藏)

二六〇

紅屋

與介様

黒住 左京

貴下

五七

夜前者得御意大慶奉存候然者其節御頼申上置候通別紙之
通乍御役介此者に御渡し可被下候此請取者貴家へ御預置
可被下候委敷者拜顔萬々可申述候一偏に宜敷無間違奉頼
候以上

巳 正月廿九日

(山本貞治郎所藏)

二六一

紅屋

與介様

黒住 左京

内用

甚以耻入奉り候得共のかれかたき人々被頼候間少之間金
壹兩御時借可被下候御返金者當月中には御拂可申候書外

拜眉にて可申述候以上

未 五月四日

(山本貞治郎所藏)

二六二

紅屋

與介様

黒住 左京

貴下

彌御堅康に被成御坐目出度奉存候于誠に先達者大御役介
忝仕合奉存候則同人々元利共爲持指出し申候間御算用御
受取可被下候其内參上御直に御禮可申述候吳々も同人々
宜敷御禮申吳候様申付候折節急き用事斗如斯御座候不備

六月朔日

尚々日限延引相成此段御斷申上候以上

(竹原與七郎所藏)

三三

二六三

與介様

黒住

先達而御時借大に延引仕候則札銀五拾匁御受取可被下候書外拜顔万々可申述以上

戊 十二月廿九日

(竹原與七郎所藏)

二六四

田中村

岩太郎様

黒住 左京

不及貴答

餘寒甚敷御座候處彌御堅剛に被成御座候由珍重不過之御事奉存候然者先日者留主へ御出被下候所出違御殘多に奉存候承り候得者福田村慶藏事御尋被下候よし隨分人は正直物と奉存候宜敷御取斗可被成候且又此者も瓦師之者にて人柄者正直成物と存知られ候同人が委細之處者御聞之上宜敷御取斗可被成候餘書者拜面にて萬々可申述候頓首

二月九日

(長瀬猪真治所藏)

二六五

田中村

岩太郎様

黒住 左京

當用無異

三三

未御年始も不申上大に御無音御斷も無御座次第に御座候
彌御揃御壯剛に被成御座珍重不過之奉存候然者今村講銀
寄甚延引に相成今少かけ候得共先是ほご指し出候別に夫
夫申上候御落手可被下候小子義も甚世話敷以外に大御無
沙汰仕候吳々も此段御斷申上候何事も拜顔にて萬々可申
上候謹言

正月廿七日

尙々乍末筆皆様へ宜敷御申上可被下候以上

(長瀬猪真治所藏)

二六六

田中村

岩太郎様

貴下

黒住 左京

已來彌御壯健に被成御座目出度御事に奉存候申分も無御
座御無沙汰仕候此段者御斷申上候誠に此間者何寄之御品
御取揃御祝被下忝幾久敷受納仕候且二日には毎度之通か
うしやく仕跡にて御盃いたゞき度奉存候乍御苦勞御入來
可被下候書外拜顔にて萬々可申述候以上

正月晦日

尙々乍末皆様へ先日之御禮宜敷御頼申上候又々以上

(長瀬猪真治所藏)

二六七 彌御機嫌能被成御座奉大賀候然者今日者參上可仕と奥様
に申上置候處不意に用事出來仕候間心外に御無音申上候
此段御斷申上候委細者尊顔にて萬々可申上候急用事斗如

二三

斯御座候以上

二月十四日

石田鶴右衛門様

黒住 左京

尊苔に不及

(船木甚兵衛所藏)

二六八一筆啓上仕候時分柄薄暑に相成候處其御地 尊所様益御
機嫌能御勤被遊候由奉恐悅候隨而御館皆々様御機けんよ
く被成御坐候御次に小子方皆々無異儀相暮居申候此段乍
恐御尊意易く思召可被爲下候何かと申内御歸りも今少に
罷成候様に奉存候只今之開を御覽に入度と奉存候申上度

事は澤山に御坐候得共迎も愚文にては難盡申候間只御請
迄亂筆御推覽可被下候恐惶謹言

五月二日出

黒住 左京

石田鶴右衛門様

尙々次第に暑に相成候間御自愛專一に可被遊候以上

(宗家所藏)

二六九 向寒之頃に御座候處彌御揃被成御堅剛に被成御坐珍重不
少御事に奉存候然者先達而者櫻井參上申段々御役介相成
忝奉存候又々來春之薪木又々御役介申上誠に去年御役介
申上候處段々に御心配被成下候由難有此上も無御坐結講
にて大^第一徳用にも相成其上たき付は入不申甚以辨^利理成事

にて家内一統大悦に御坐候重々御役介に奉存候得共不相替宜奉頼上候尤取越し候處三月末か四月中頃迄に御下被遣候は、猶々甘居申候田植前に相成候而者人夫に困り申候間其段御含置可被下候偏に宜敷奉頼上候且薪木之處昨年之程御役介奉願候すみ之方は別に被成可被下候先すみ代として貳百疋指上候間宜奉頼上候尤過不足之所は跡々御算用可申上候吳々も御役介之段忝仕合に奉存候乍末筆皆様へ宜敷御傳聲奉頼上候いつも相急亂筆御許容御推覽可被下候以上

十一月

黒住 左京

中村權太夫様

(宗家所藏)

二七〇

又々申上候甚以世話敷御坐候故一夕つゝ御坐候間廿四日早朝には參上仕候同日晝夕口釋仕廿五日早朝には下加茂へ參り右同斷仕度候左様思召置可被下候一筆啓上仕候時分柄寒冷彌増に御座候處 貴家皆々様御揃被成御壯剛に被成御坐候哉と大慶不少御事に奉存候隨而小子も無異に晝夜共馳廻り居申候乍憚御安意可被下候誠に先達而者遠路之處御光臨被下忝奉存候其節之仰に小子參上可申日限手前廣に申上候由御約束に御坐候間申上置候來月廿三日金川へ罷出廿四日に貴家様へ參上仕廿五日に下加茂へ罷越廿六日に歸宅仕度奉存候餘書拜顔之節萬々可申上候早々頓首

壬 九月廿九日

中村權太夫様

尚々乍末筆皆様へ宜敷御傳聲可被下候以上

(船木甚兵衛所藏)

(御名切抜)

二七一

河本

龜次郎様

黒住 左京

貴答

拜見仕候御堅父様又御持病にて御難義被成候由扱々御氣
毒に奉存候右付に小子參上可仕候様御申越御尤に奉存候
廿三日晝夜も神用御座候廿四日石尾喜六郎まで御向被
遣候は、無理に參上被仕候其外者當月中一日も明は無御

座候尤廿五日者早朝に歸宅仕らねは相成不申候則於今村
宮に晩夕共口釋御座候委敷者御使へ御聞上可被下候甚急
大亂筆御推覽可被下候以上

九月廿日

尚々此神府御戴被成候て御快氣被成被遣候様御申上可被
下候

(森文吾所藏)

二七二

口上

一中綿三拾斤態々爲持御越し被遣忝代札者追而御算用可
仕候右御受取迄如是御座候以上

中野

三三

七月廿六日

河本村

龜次郎様

黒住

(森文吾所屬)

二七三

大坂御倉屋敷

三澤佐兵衛様

黒住 左京

貴下無異

一筆啓上仕候時分柄向暑之節に御座候處其御地貴家皆々様御揃御壯剛被成御坐目出度御事奉存候隨而小子義不相替勢ひ宜彌以繁榮仕候此段御安意可被下候春方者參上仕段々御取持被遣殊に大勢ひ段々御役介罷成忝仕合に奉存

候其後門人内へ段々に御文通被下其御地にも追々に此道御したひ之御人御坐候由右に付下拙登坂可仕候様御申越被下忝者奉存候得共御國益盛に相成只今にて者申出され不申候此度者心外に御斷申上候私名代として蜂谷俊造櫻井喜間太未熟に者御坐候得共是を遣はし可申候間宜御引廻奉頼候尤御あしらい者堅く被成間敷候且申上度義者澤山御坐候得共いつも世話敷誠に用事斗荒々申上候委敷者右両人之者御聞可被下候尙書外得拜顔之時萬々可申述候恐惶謹言

六月

黒住 左京

三澤佐兵衛様

太田 勇介様

二七三

尚々乍末筆御家内様方へ宜敷御傳聲奉頼候以上 (宗家所藏)

二七四 一筆啓上仕候先以其御地貴家皆々様御揃被成益御堅剛に御坐被成珍重不過之御事に奉存候隨而小子皆々御同意に居申候此段御安意可被下候誠に先達而は大勢參上申段々御取持相成忝御禮難盡申御事に奉存候罷歸り家内一統に御噂のみ仕相悅居申候家内不殘右御禮申上候様申出候且其時之連中厚御禮申上吳候様申出候何事も自然之時を待得拜顔之積る御咄萬々可申述恐惶謹言

四月

三澤佐兵衛様

黒住 左京

尚々此御神號七ヶ條並御守令進上候御流手様可被下候甚急略文御免可被下候以上 (宗家所藏)

二七五 已來彌御機嫌被成奉恐賀候然者此者門人内之代參に御坐候いつも之通宜敷御神前向奉願上候以上

三月八日

黒住 左京

笠井太夫様

(船木甚兵衛所藏)

二七六 彌御揃被成御壯健被成御座珍重奉存候然者來る六日御屋敷様々奉參上候御約束に御座候處赤坂々又罷出度奉存候

に付當月晦日か來朔日兩日之中又者十五六日かに御ふり
かへ奉願上度奉存候近頃御役介に奉存候得共宜敷様御伺
奉頼上候以上

七月廿七日

寒川六兵衛様

黒住 左京

貴下

(益尾吉太郎所藏)

二七七

御受取

爲河本組と札銀五拾匁御初穂に御備被下難有幾久敷神納
仕候右御受取如此御座候以上

七月五日

黒住 左京

河本組

御名主中様

(森文吾所藏)

二七八甚寒之砌御坐候處各様御揃被成御壯康に被成御座候由珍
重不少御事に奉存候然は今村氏講會來七日會仕廻に於私
宅御入札被成下候様奉頼候萬々一御指合も有之候は、御
入札同日迄に御越し可被下候委細者拜眉之時萬々可申述
候以上

十一月廿二日

黒住 左京

(花押)

和氣郡尺所村

武 介 様

大供村

金十郎様

備中花尻村

太田助内様

中仙道新田

平六郎様

矢坂村

幸四郎様

志賀淳平様

御連名前後仕候段者御斷申上候以上

(宗家所藏)

二七九 已來彌御機嫌能被成御坐候由奉恐壽候然者此者門人之代

參に御坐候間宜敷御取斗可被下候奉頼上候以上

三月九日

黒住 左京

白髮太夫様

(船木甚兵衛所藏)

二八〇 一筆啓上仕候先以 殿様益御機嫌能被遊御坐候哉と乍恐
恐悦に奉存上候御次貴所様にも彌御堅康にて御道中無御
滯御着被爲成候哉と大慶至極に奉存候隨而小子も無異に
罷過居申候乍憚此段御休意可被爲下候誠に於御國者度々
之御召にて難有仕合に奉存候御道中並御着御被遊候已後
者如何に被爲入候哉乍恐宜敷御伺又近來之御様子被仰聞

可被下候恐惶謹言

三月十二日

堀市郎様

黒住 左京

(宗家所藏)

二八一

乍御役介急便に御届け可被下奉願候

津高郡安部倉

御野郡上中野村

呑歡様

黒住 左京

急用

以手紙得御意候彌御障も無御座珍重不少奉存候然者相成候は、急々に御出可被下候私齒も下の方者宜敷候得共上の方俄にやくに立不申外にも御頼申吳候様申人も御座候

間吳々も急々に御出可被下候書外御目に懸り萬々可申述候以上

八月廿一日

(宗家所藏)

二八二

七島屋

五郎右衛門様

黒住 左京

貴苔

拜見仕候被仰^{如カ}先日は少々御跡にて御殘多奉存候私も晝頃迄に者新町公御會にて心外に得御待不申候吳々も御殘念に奉存候然者十七日小西屋へ先日御約束申上置候所只今

二八一

相考へ候得は志賀氏二重に約束仕甚赤面之至に奉存候右
に付廿六日迄御延し可被下候廿六日赤坂へ歸かけに仕度
奉存候誠性根に生ねぬけにて時としてはかやうにつまらぬ事
出来仕候吳々も宜御斷申上候甚急早々以上

四月十六日

(木村茂太郎所藏)

二八三

植田佐名右衛門様

黒住 左京

貴館

貴札被下忝拜見仕候如仰去々年始而得尊顔大慶不少奉存
候其後江戸御詰中御歸國以今彌御堅康に被成御座候由珍
重不斜御事に奉存候且奥様にも益御機嫌よく于誠御平生

之御様子扱々目出度於小子にも難有全御一心と奉存候將
又何寄之御品被懸御意不淺忝拜納仕候爲指義も無御座候
得共右は尊苔迄如斯御座候恐惶謹言

三月十八日

黒住 左京

植田佐名右衛門様

(永見寛録所藏)

二八四

河上市之丞様

黒住 左京

貴苔

拜見仕候未殘暑嚴敷御座候處彌御堅康被成御座候由奉大
賀候然者御祈念之儀委細奉承知候何事も拜顔之節萬々可
申上候甚急貴苔迄如是御座候以上

六月晦日

尙々爲御初穂こ一封御備被爲成慥に神納仕候以上

(宗家所藏)

二八五

鉄屋

平八郎様

黒住 左京

急用事

甚暑之砌彌御障無御坐候哉こ奉存候御産婦も彌御肥立奉
存候未御悦にも参り不申候御無音御斷申上候然は今夕御
會末御指合御坐候哉こ奉察候左候得は七島屋にても小西
屋にても是か間違候得は郷司石尾にても何れにても乍御

役介ツカサ口釋之内に鳥渡御左右可被下候一こうへひろう仕候
用事斗如斯御坐候以上

閏 五月廿八日

(宗家所藏)

二八六

又々申上候奉恐入候得共御序之節御上様宜被仰上可被
下候奉願上早々以上

一筆啓上仕候其暑難堪御坐候處先以 殿様御機嫌能被爲
遊御座候由恐悦至極に奉存上候御次に貴所様御揃被成御
堅剛に御勤被爲成候由珍重不過之御事に奉存候隨而野子
義も不相替日々世話敷難有相暮居申候乍憚御休意可被下
候先達而下野儀作罷歸り御様子委敷承り大慶に奉存候且

二八五

平松と申人參上仕是も近來之入門にて未至而未熟には御坐候得共少々つゝ道之咄仕候何か近頃様子申上候哉と奉存候尤同人出立時分とは又追々開け申候下野者小音には御坐候得共平松とは少は宜敷御座候間又々參上之上者御聞可被成候誠に平日者心外に御無音斗御斷無之次第に御座候眞平御許容可被下候恐惶謹言

閏 五月廿七日認

黒住 左京

野村庄兵衛様

尙々乍末筆御奥様にも宜敷御申上可被下候以上

(宗家所藏)

二八七 一筆啓上仕候時分柄日々鬱々敷天氣にて御座候處其御地

貴家皆々様御揃彌御堅剛被成御坐候由珍重不少御事に奉存候誠に春方者登坂之節者得拜顔之大慶不少御事に奉存候隨而野子義も不相替世話敷日々を相暮し居申候此段御休意可被下候然者此度遠路之處被懸御意何寄之御品澤山に送り被下忝幾久敷長寶仕候乍憚様皆々様に宜敷御禮奉頼候

一此度三澤太田氏の門人内の野子登坂可仕由段々に申越候得共小子義國元之處大開にて中々申出事相成不申候先門人之内一兩人遣し度奉存候宜敷御引廻し御頼申上候いつも世話敷亂筆御推覽可被下候何事も門人の御聞上可被下候恐惶謹言

五月廿日認

黒住 左京

喜多村

傳左衛門様

(森住豐治邸所藏)

二八八

黒住左野吉殿

同左京

當用

中仙道に早々御返し可被成候最早入用には無御坐候宜敷
禮申候様御申付可有之候以上

十八日朝

(宗家所藏)

二八九 拜見仕候誠に押詰無々御事多し奉存候扱此間平松氏相見

へ貴家様之御事段々はなし合者仕候得共私何も御にくみ
申なご、申事た、一言も申たる覺無御座候せつかく道に
御入候事故御繁榮をこそ祈居申候平松は何と御申候か迎
も愚文にては分りかね申候誠に見様聞やうと申事も御座
候たごへ貴家の事申候とも同人もごもく申か様に御咄
し被申ごは考へ不可有夫ごも御にくみごは思ひも寄ぬ事
に奉存候書外拜顔之時萬々可申述候以上誠に世話敷大亂
筆御推覽可被下候

極月大晦日

黒住

蜂谷御氏様

(田外源八所藏)

略ノ御免可被下候

矢坂

正三九様

黒住

貴下

此間者御苦勞奉存候生坂之方みくし調ひさへ仕候は、至極宜御坐候間御考へも御坐候は、偏に宜敷様奉頼候しかし相調ひ候間如何と被存候何とそく相調候様幾重もよろ敷奉頼候以上

菊月十九日

黒住

(宗家所藏)

郷司茂左衛門様

黒住 左京

拜見仕候彌御機嫌よく被爲在目出度奉存候然は私義少々不快に付一昨日新町又御断申候夫故御無音申上候大に御心配かけ恐入申候段々宜敷候間明後者罷出可申候必く御心配被遣間敷候明日は御入來奉待候早々以上

(船木甚兵衛所藏)

郷司様

黒住

此間は御無音申上候彌御きけんよく被成御坐めてたく奉存候私も宜敷大甘申候其中参しまし御禮可申上候早々以上

七月十二日

(船木甚兵衛所藏)

二九三 昨日の御書付の通りにつらせ其上五寸尺長く致し置候ま
ま左様御申可被下候おこら昨日より相勝れ不申夫に明日
はむかいに参るよし又あかるこも此人に御付御歸り可被
成候まつはあらくめて度と

卯月けふ

左京

おいこの

(宗家所藏)

二九四

口上

一寸申上りし時分柄得ほごあつさに相成まし候處彌御機
けんよく御入らせ御めてたく存りし御次に此方みなく

もおなし御事に相暮子こも二人も能遊ひ甘居申りし御安
心被遣下され候時分から故子こもなつもの御越し被下候
何も無御座候ゆへ大こまり御座候おこらもおまへへよ
ろ敷申上候やう申出候急用事斗あらくめて度かしく

五月廿三日

くろすみ内

出屋

御ふもしな

(益尾吉太郎所藏)

二九五

〆

甚急略御尊免可被爲下候

(宛名切抜)

黒住 左京

一筆啓上仕候時分柄得程餘方暖和に罷成候處益御機嫌能御出

三三三

勤被遊候由奉忍賀候隨而當方尊館皆々様御機嫌能被成御
坐御次に小子義彌世話敷罷暮難有仕合に奉存候何かと申
内御歸郷も近寄候間嘸々御きをひ可被遊と奉察候積る御
咄可申上と夫のみ奉樂候此度之御江戸者誠に御安心被遊
候哉と奉存候彌以御留主御六間敷吳々も難有御事に奉存
候此度者世話敷中にも誠に世話敷御座候間大亂筆如斯御
坐候恐々謹言

二月二日

(杉本多一邸所藏)

二九六 一筆啓上仕候先以暖氣彌増御座候所其御地 尊君様益御
機嫌能被成御出務奉忍壽候隨而當地尊家皆様御機嫌能御

次に小子皆々御同意に相暮居申候此段尊慮易く思召可被
爲下候誠に御歸も今少に罷成申候積る御咄申承度と奉樂
候小子義も當月末か來月早々には出立仕候而參宮望みに
御座候夫故最早御歸國迄は文通御無音申上候先は時氣御
見廻旁々如斯御坐候恐惶謹言

三月十六日

黒住 左京

(船木甚兵衛所藏)

二九七 以手紙申上候誠に先達而者參上申段々御深節切々に相成忝仕
合に奉存候其節被仰候御祈念宜敷執行仕候間御受納可被
下候何事も期自然之時候恐惶

四月五日

黒住 左京

(桑田熊藏所蔵)

二九八

(切抜) 様

黒住 左京

(切抜) 答

拜見仕候尾關様も無御滞御着被爲成誠に大悦に奉存候然
は今日者得御光駕不被遊候由御殘多に奉存候御女中不快
に御坐候由明日參上可申候由奉承知候折節得客來尊答迄
如此御坐候以上

四月十二日

(桑田熊藏所蔵)

二九九

以手紙啓上仕候時分柄得程餘方暖和に相成候處彌皆々様御揃
被成御堅康に被成御座珍重不斜御事に奉存候誠に先月者
參上申毎々御取持忝仕合に奉存候殊に其節者御家内様方
御入門被成大慶至極に奉存候且又牛窓へ當九日可參由申
上置候得共九日に者無據神用出來仕候間十日に參積に御
坐候若其節御出も被爲成候哉に被仰候様奉存候間若日都
合間違候而も不宜奉存候間先達而申上候龜屋も參られ候
由御咄御座候間乍憚此段御通達可被下候奉頼上候乍末皆
様に宜被仰上可被下候恐惶謹言

四月三日

黒住 左京

尚々當月も十八九日に者參上仕候左様思召置可被下候以
上

(鈴木敬二所蔵)

三〇〇 新春之御慶重疊目出度申納候先以其御地尊君様益御機
嫌能御越年御出務被遊候哉奉恐壽候隨而當地尊家皆様
御揃被成御越年被爲成候次に小子皆々御同然に加嘉年仕候
此段御尊意易く思召可被爲下候右者年始御祝書迄如斯御
座候猶期榮春之時候恐惶謹言

正月二日

黒住 左京

(湯口早枝所藏)

三〇一 一筆啓上仕候時分柄暖氣彌増候處彌御機嫌能被成御出務
候哉と奉珍壽候段々御留主様御傳言被遣難有奉存候御

燒失後益御殊多事に被成御座候由嚙々左様可有御事と奉存
候隨而當地御母君様御初御次に小子方皆々御同意に相暮
居申候乍恐御休意可被爲下候何とやら承り候得は當年者
御歸郷近寄候由結構之御事に奉存候積る御咄可申上と相
樂み申上候別而申上候事も無御坐候得共時氣御見廻旁々
如此御座候恐惶謹言

三月

黒住 左京

(石原平八郎所藏)

三〇二 一昨日者御細書被遣拜見仕候乍去其節者出違夕に罷歸り
拜見故御返事も不申上候今日鳥渡參上仕候得共御出違に
て名札斗則御屋敷様御人に相願罷歸り誠に此度は數

年來之御大望一時に御成就被成此上も無御坐目出度御事にて嘸々御大慶と奉察候於小子も此上も無御座難有奉存候今日河上氏へも右御禮参り候所御同人も大歡にて小子とも互に悦ひ相咄申候且一昨日者段々之御細書殊に爲御初穂と南籙一封御備被下此度之御初穂者誠有かたく神納仕候今日拜面にて萬々御悦ひ右御禮申上度奉存候得とも右仕合御座候間鳥渡當家立寄大亂筆なから右御答迄如斯御座候委敷者拜顔万々可申上候以上

閏 卯月五日

於紅屋相認候間

大亂筆(破損)

黒住 左京

(宛名切抜)

(藤本源四郎所藏)

三〇三

一筆啓上仕候向寒之節彌御機嫌能被爲御勤恐悦至極奉存候隨而御留主様益御機嫌能被成御座奉恐賀候御次に小子彌以世話敷只今之様子に候得は後々は如何に相成候哉相分り不申候誠に難有事に奉存候毎度御細書奉拜見候奉感拜候何かと申内年内も今少に相成年明に相成候は、直に御歸に相成只今之道を御覽に入度奉存候誠に晝夜とも少之間も無御座夫故申上度事者山々御座候得共尊答迄寸睹^格奉捧候先は荒々如斯御座候恐々謹言

霜月十六日

黒住 左京

(花押)

尙々次第に極寒相成候間諸事御自愛專一に可被遊候以上

二六二
(船木甚兵衛所藏)

三〇四 時分柄冷氣甚敷御座候處其御地

尊君様益御機嫌能被成御出務候由珍重不斜御事に奉存候
隨而當地 尊家皆様次に小子皆々御同意に相暮居申候乍
恐此段御尊意易く思召可被爲下候每度く御細書被遣奉
感心候何かご申内次第御歸國も近寄候間迎も御尊面なら
ては委敷御事は難申盡候爲指御事も無御座候得共時候詞
御機嫌旁々如斯御座候恐惶謹言

九月十八日出

黒住 左京

(宛名切抜)

尙々時候御厭ひ御出務可被遊候以上

(倉光必明所藏)

三〇五 一筆啓上仕候先以向暑之時分に御坐候得共其御地 尊君

様益御機嫌能御出勤被遊候由珍重不斜御事に奉存候隨而
當地尊家皆様御両君様御機嫌能被成御座目出度奉存候御
次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召
可被爲下候每度御尊書難有每度く御勇敷御文面難有奉
拜見候彼是申内御歸郷も日々近寄候間萬端御様子承度ご
奉樂候別而爲指御事も無御坐候得共御尊荅時氣御見舞旁
旁如斯御座候恐惶謹言

六月十六日出

黒住 左京

(宛名切抜)

尚々次第に暑さ彌増に御坐候間萬事御用捨專一に可被遊
候委敷は追々申上候此度も甚世談敷先筆を留候以上

(船木甚兵衛所藏)

三〇六 一筆啓上仕候先以冷氣彌増候處 尊所様益御機嫌能被成
御出務候由珍重不斜御事に奉存候隨當地尊家御初右御連
士小子皆御同然に相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲
下候毎度く御念書被遣奉感心候此度石尾御氏御登り御
座候間委敷御事は御直に御聞可被爲遣候彼是申内次第に
御歸國も近寄候間萬事尊面ならて申上かたく先は荒々如
斯御座候恐惶謹言

九月九日認

黒住 左京

(切抜) 様

尚く時氣御厭ひ專一可被遊候以上

(船木甚兵衛所藏)

三〇七

尚々次第に甚寒罷成候間諸事御自愛大一に可被遊候以
上

先月十五日出尊書當月二日に至來奉拜見候甚寒之節益御
機嫌能御勤被遊候由奉恐悅候至而當地御両家皆々様御機
嫌よく被成御座奉恐賀候御次に小子も御同意に相暮居申
候乍恐御尊意安思召可被爲下候扱御尊書奉拜見候無此上
も難有彌御勇敷御様子御出立前に御約速之通被成御座朝
暮奉祈候印かこ誠に御嬉敷御尊のみ申上候何かこ申内年

三〇七

内も今少に相成年明に相成候得は直に御歸り罷成候間積
る御咄申上度と相樂奉待候(虫喰)頭は小子も彌世話敷罷成
困り居申なからも難有奉存候迎も人は日間(暇)にて者却而難
義と奉存候此度者何も不申上何事も來春日出度可申上候
先は尊苔寒氣御見廻旁々如是御座候恐惶謹(虫喰)

十二月

黒住 左京

(切抜) 様

(花押)

(近藤喜八郎所藏)

三〇八

(宛名切抜)

黒住 左京

拜見仕候彌御肥立被遊候由奉恐賀候且御名段々奉伺其宜
敷を頂戴仕候を奉付上候御はた御守者先一通のを奉指上

又追而御歳のを相調指上可申候急御尊苔如此御座候以上

六月朔日

(河本長兵衛所藏)

三〇九

(宛名切抜)

黒住

(切抜) 答

拜見仕候若様御勝不被成候様御心配可被遊と奉存候只今
遠方々御祈念相頼に人参り候間今日者此方にて御祈念申
上候而明日にても御見廻可申上候委敷者得尊顔萬々可申
上候甚急(破損)

(小林和免吉所藏)

三〇今日者快清仕難有奉存候然者十七日には 御奥様御光來
被遊不相替神前へ爲御初穂御備被遊難有幾久敷神納仕候
且又今日者小子御尋被爲下殊に何寄之御品色々御惠被成
下難有頂戴仕候且小子も追々快方にて今日共大に宜敷甘
居申候乍恐尊意安く思召可被爲下候明日は參上仕何か御
禮御直可申上と奉樂候先は御禮早々以上

極月廿日

(桑田熊藏所藏)

三一

(宛名切抜)

口上

此間者參上申段々御馳走被成下難有奉存候彌御機嫌能哉
と奉大賀候然者いつも御役介様に奉存候得共此手紙御一
所に奉願上候書外尊顔にて萬々可申上候以上

六月朔日

(桑田熊藏所藏)

三二如仰昨日者參上仕段々御馳走難有奉存候然者今日者御酒
湯被遊御内祝として段々に御取揃被爲成御備物被爲下誠
に 無此上難有幾久敷奉神納候書外得尊顔御禮可申上
候恐々

正月廿一日

尚々乍末筆皆々様へ宜禮奉願上候以上

(桑田熊藏所藏)

三三 御手紙参り奉拜見候追々御順快被遊乍恐大慶に奉存上候
且今日は暮之爲御初穂と御國寶貳拾目並御着一袋御備被
遊難有幾久敷神納仕候委細者参上にて萬々御禮可申上候
以上

十二月十五日

(桑川熊藏所藏)

三四 留主皆々御別条無之と奉祈候私も七日夕大坂迄上下とも
不殘誠に大丈夫にて着いたし候御安心可被下候此よし御
連中へも宜敷御序に御傳へ可給候難有事者私も日々達者

に相成誠にく不思議成次第に御座候有かたしくく

當月八日朝

(宗家所藏)

三五 一筆令啓上候先以其御地貴家皆々様御揃御堅剛被成御坐
候大慶不少御事奉存候誠に先達而者其御地へ参上申段々
御深切相成忝仕合に奉存候右御禮大に及延引候此段御許
容可被下候次に小子義も甚仕合宜廿七日海上凡五六里程
出廿八日夕迄に眞こもにて誠に疊之上のここくにて則夕
福島迄着船仕難有御事に奉存候此段御安意可被下候

(宗家所藏)

三二六 追而申上候道も彌開け候哉河上氏ハ者石黒氏御咄御坐候
處甚以感心にて則御同人預屋敷にて御家内中其外御那方
諸役人に聞せ度この御事にて段々に御頼御坐候其外御角
屋敷内所にてかうしやく始り四人方之頭分之者別に會を
相頼又觀音地中にても(斷絶)

(宗家所藏)

三二七(切) 援ハ且當盆前御仕廻口御六か敷御様子奉察候
右に付小子ハ貳三程相成候はハ被仰去暮ハ小子も甚大
金を請込大に迷惑仕候夫故甚心外ながら御斷申上候委細
之義者拜顔之節可申述候甚急き貴答迄亂筆如是御坐候以
上

七月十三日

(細木甚兵衛所藏)

三二八 三日出之尊札十二日に相達し奉拜見候甚寒之節彌御機嫌
よく御出務被遊候由奉恐壽候隨而當地尊家御兩方様御機
嫌よく被成御座御次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍
恐御休意思召可被爲下候

(細木甚兵衛所藏)

三二九 昨日は御光臨被遣有かたくそんし奉候御頼被成候御龜宜
敷心願仕御うかハひ申候處むすひ置候方宜敷御座候其内
貳つむすひ候方猶ハよる敷御座候あハ二つは不宜候先

三三〇

は用事斗申上候めて度

正月十三日

(船木甚兵衛所藏)

三三〇 爲御初穂之御國寶一封外に爲御肴料之同一封神前へ御備被下難有幾久敷神納仕候乍憚皆々様へ宜敷御禮奉賴上候何事も來春得拜顔萬々御禮可申上候右御受取まで如斯御座候不備

極月五日

(森文吾所藏)

三三一 拜見仕候如仰甚寒之節に御座候處皆々様御安全に被成御

三三二 座珍重不斜御事に奉存候然者歳暮之爲御初穂金子一封神前へ御備被下難有幾久敷神納仕候乍末行皆々様へ宜敷御禮奉賴上候書外來陽日出度可申上候謹言

十二月廿二日

尙々由津里ゆつりも爲御初穂國寶壹封被備慥に神納仕候御序之節宜敷御傳言奉賴候

(森文吾所藏)

三三三 以手紙申上候彌御堅康に被成御坐珍重不少御事に奉存候然者三日には參上可申候御約速來申上置候所無據故障出來仕候故此度者心外に御斷申上候十八日に參上可仕積に居申候委細者參上にて萬々可申上候右御斷迄如斯御坐候恐

恐

十月朔日

尙々御先方へ宜敷御取成奉頼候乍末皆々様へ宜御申上可
被下候以上

(鈴木敬二所藏)

三三三 追而申上候若御序も御坐候は、八田尾高氏へも無據故障
御座候故此度者御斷申上候由御申遣され可被下候奉頼上
候

(鈴木敬二所藏)

三三四

追啓

來春の御取懸り被成候方至極宜敷御座候しかし少ひかへ
め被成候方猶々宜敷と奉存候其内委敷拜顔にて可申上候

(鈴木敬二所藏)

三三五

(前文切取)

罷成候間來陽に罷成候得者直に御歸國に相成候間つもる
御咄申上度事澤山に御座候急用事斗荒々如斯御座候恐惶
謹言

(鈴木甚兵衛所藏)

三三六 一今村講銀百五拾目御越慥に受取申上候過不足之義者跡
より可申上候小子義も日々誠に世話敷夫故心外に御無音

仕候何こそ近日には御禮に參上仕何か御咄可申上候今日も甚世話敷御答御受取迄如是御坐候恐々

正月十二日

尙々皆々様へ宜敷御申上可被下候以上

(船木甚兵衛所藏)

三三七 尙々今夕者村瀬會に御坐候御出廣廣可被成候御役介に奉存候得とも今夕會仕廻直に貴家へ參上仕度明早朝和氣之方へ罷出度奉存候委細者拜顔にて萬々可申述候以上

(船木甚兵衛所藏)

三三八 夜前者拜顔を得大慶に奉存候然者夜前御目にかゝりな

ら失念仕候兼而御役介に相成居申候今村氏講會來る七日夕に御入札奉頼度若御透も御座候は、御出席被遣候は、忝仕合に奉存候右御案内可申上候急用事斗如斯御坐候以上

十一月二日

(船木甚兵衛所藏)

三三九 來考る六日出七日出兩通相達し拜見仕候六日出御細書大に心配仕又七日出貴札拜見仕大安心仕候先日之御細書におそろき段々神闔奉伺候所少神闔不宜候様にて小子も心配仕段々に厚く祈念仕候處へ此度之御細書にて大に安心仕候尙又宜御禮御繁榮之執行可仕候御札守も進上可仕筈に

御座候得とも今少祈念仕進上仕候委敷者拜顔萬々可申述候以上

八月七日

尙々御初穂壹封御備神納仕候

(船木甚兵衛所藏)

三三〇 追而書添申上候彌御機嫌よく被成御座目出度奉存候隨而御宿所皆様益御機嫌よく下拙も此節は甚多用先達而とは俄に大せい罷成大困りに御座候而彌難有奉存候此段御尊意安く思召可被爲下候以上

五月十三日調

(船木甚兵衛所藏)

三三一 一筆啓上仕候時分柄暖氣彌増に御坐候處益御機嫌能御勤被遊候由恐悅至極に奉存候隨而當地御館皆様御機嫌よく被成御坐御次に小子無異に相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候毎度御勇々敷尊書被成下難有奉拜見候道も彌開け重々難有事數々御坐候得共迺も筆紙には難申盡日御歸郷も近寄候間積る御咄申上度と奉樂待候先は荒々如此御座候恐惶謹言

(船木甚兵衛所藏)

三三二 も、の歌拜見致ししらぬなから面白くかんし入申候よも桃カ御笑草に心指志カはかりしるし候ま、御直し願ひ奉り候

千早振神世のもの、のいまこゝに
君に引れて顯れにけり
御他見は申迄もなく候得とも必く御無用可被下候ケ様
の時者歌も心懸ねは誠に赤面之至に御座候
(近藤喜八郎所藏)

拜見仕候彌御機嫌能被成御坐候由奉恐賀候然者御不快も
最早五十日も十二日相當り候由尤御番共者御勤被成候
も宜哉に奉存候其外御會などは今少御扣被遊候方宜しか
し夜之會共へ者時々御出被遊候而も宜哉に奉存候
一御養子様之事御相應之御事も御座候は、至極宜敷に奉
存候其外は先御ひかへめと被成候方宜敷哉に奉存候其内參

上申萬々御咄申上候右者御荅迄荒々如此御座候恐々

六月朔日

尙々乍末筆皆々様へ宜敷御申上可被下候以上(益尾龜次郎所藏)

向暑之節に御座候處彌其御地貴家皆々様御揃被成御壯剛
に被成御坐候哉と奉賀候隨而小子方皆々御同意相暮居申
候乍憚御安意可被下候然者先日者御出府被成候由七島屋
より承り會先同人を御知らせ申上候間御出廣廣も被成哉と
奉存候得共得御出も不被成少々御咄申上候故岡本屋へ御
尋申上候處其朝御歸り被成候由殘念に奉存候尤廿四日に
は參上之積に御坐候處少々足痛痛にて心外に御無音仕候此

段御斷申上候近頃者誠にけしからぬはけ敷事に罷成難有
者奉存候得共相さばけ不申くつたく仕候何ぞ仕方を付不
申はこん切に相成候哉と奉存候此段御推察可被下候且先
達而御辱被成候尾上之御縁談之儀段々に委敷相尋候處至
極御本人宜敷御様子に御座候間何卒御じゆく談被成候而
も宜敷哉と奉存候誠に急大亂筆御推覽可被下候以上

(宗家所藏)

三三五 以手紙申上候彌御堅康に被成御座奉珍壽候然者先達は安
之介様にも御達者にて始終御世話に寵成忝奉存候

(村岡萬喜藏所藏)

江戶幕府の御用掛土の官符の遺蹟を遺蹟の遺蹟の遺蹟

雜集

文政七年申三月十二日出立

伊勢參宮心覺

黒住宗忠

一十二日朝七ツ半に出立

四ツ半舟橋にて休足夫よ

り九ツ時伊郡いんへにて休足同八ツ時片上宿屋疊屋橋一右衛門晝旅籠夫夫より三石

へ此夜大雨ふる越度そんじ候處折節橋左近様御留主故宿なし其ま

ま留り十三日夫が船に乗九ツ前出す八ツ前中戸こ

甲所へゆく西風少出る天氣中晴なり夫がまほにて大

た多府ふよりはじめる其行事飛かまぐ歌に

足いらすこふかまぐくに行道は

爰天カそ高廠の原の道なり

夫がけんじさいう處處にカ行風またおち疊の上のこまぐ爰

には山の間に數々カ小き舟をつなき山の上に高く木にて火のみのやう也事成カを其作りカ中に二三人居る也是はぼらを取見合也又夫々風大分出面白事限なし八ツ前より天氣はれいよく舟はしる也同時過には赤尾穂カの沖へゆく也同七ツ前に室へつき爰にてかゝり暮過より舟を出カを彌風出おひてよく凡九九ツカ前には明石爰に懸り夜あけて○十四日五ツ前に舟をうけ少つゝはしる爰そ名名ニカあふ舞子の濱なり同四ツ時分に一の谷へつく爰より風北東に成舟ゆかす四五人あかり各ひく夫々兵ひやうごへ九ツ過に着爰にて一日見合風東かせにて其夜カよ舟に留り留カよく○十五日朝上り夫々尾カあまか崎まであゆみ折節同道久之介はしかにて甚こまり馬に乗り西の宮を

十六日一日 雨天にて稲荷へ参折人形芝居面白事候
 十七日 難波 新地見世物 數々目をおとろかす事限なし言語に難述候

あま尾カかさきまでのらせ爰を舟にのり大坂へ夜五ツに着其夜カよ雨大にふり○明十六日先爰にて見合同人はしかま空カとに盛りと見へ候先爰にて一兩日見合よく○十七日朝天朝カき惡敷晝を空晴夫より彼はしか人も大に快氣ま座カとにふしきに難有ほこまたさ座カまごいう處へ行同芝居猶面白事候暮前に歸病人彌よろ敷人壹人彼病人の付置同道一人直に夜舟に乗天氣いよ夜カよし其よ甚寒し誠に平生の難有思ひしられ候○明十八日の五ツ過に伏見へつくすしやご申舟宿にてしたくいたし人足を借伏見の稻荷へ参則正一位勸請願意頼置直に吉田へ参九ツ過也○明十九日今日御取次に合夫より町内へ見物に出る先吉田日本六十餘州御神を勸

請有し靈地拜し夫を眞如堂黒谷へ参り歸り廿日にし
 んかん院にんの宮参夫を大谷宮へ参り知音院院参り祇園
 へ参り夫を清水参り夫を四條方より歸りよく廿一日
 百万へん還へ参夫を下加茂参夫同上加茂今宮大徳寺夫
 を北野平野金角寺夫を壬生東寺夫を六角堂西本願願へ
 参夫を歸廿二日一日大雨ふり廿三日京都立夫を三井
 寺へ参晝仕度いたし色々見物有り夫を八ツ過に石山
 へ参彼近み八景面白事限なし夫を草津迄行藤屋三左
 衛門方宿廿四日に立参石邊の休夫を水口龜屋治右衛
 門方支度いたし夫を坂下龜屋にまる宿至而よし廿五
 日夫を關せきを越むく本橋さいう處に休夫を津参雨ふり
 七ツ過に爰宿さる廿六日六家軒さいう處四つ過に支度

いたし夫松坂行妙照照迄行爰にてまた支度いたし夫を
 伊勢ゆき白髮大夫に参り段々馳走にてよく廿七日
 色々身を清め夫より四ツ時分に参詣致神供なご備へ
 難有御拜いたし夫をまた大坂へ歸り支度なごいたし
 其ま外下宮様へ参り其日直に串田宿紅葉屋九兵衛に
 まりやご至てよし明廿八日夫を山田に申處へ参晝支
 度いたし夫より島ヶ原さいう處に参千鰯屋利右衛門
 にご申者所に宿至て悪しゆ殊に此三日程足をいたみ各
 つかれまごに旅の難義平日の難有事思しられけり去
 なから何にもかも任まかせつけ候得はうき中にも難有
 夫を朔日彌足いたみなからかさ笠さささ笠ささささ笠ささささ
 度なごいたし夫を舟に乗り木津へ参夫を奈良に参り

とうふや庄兵衛と申者處に參よく二日(續稿未見)

(宗家所藏 小形本)

二



五

日に(虫喰)うはにして天理にしたか

う時は又



二

彌天利にしたがう時は吉也

何事も皆天道にまかせなば

ねてもさめても有かたきのみ

天保十年

亥正月元旦

奉伺所也

又若氣にもとるも



六

誠に有がたしくいよく本

の子供也

又十一日伺明暮向事

悦ひつけ有かたいくこおもふ時



二也難有しく

(宗家所藏 巻紙)

三

福田主重き病ひにふし給ふと年々
にしてすてに三度まで身まからん

さし給ふ時つたなくも我天津神國
つかみを深く祈り奉りければ不思
義に快よくなり給ふ有かたさの餘
りにかくはへりぬ

三度までいき歸りたる人はまた

からてんしくご我朝になし
ご口すさみ悦ひのこゝろやむごさ
なきにまた^{今年}し秋の末より先のご
しのとく打ふし給ひ日にまし重り
給ひいたはしさ見る^{るに怒り}忍す時に
天照太神ご主の心ご一つに成り給
へは生ごふしなりご申さごせは有

かたしご請ひき給ふやいなやその
病苦を忘れ給ひ夫より一日二日ご
ひをふるまゝ快よく成り給ふ有か
たさにかくそ侍る

天てらす神の御心人ごゝろ

ひごつになれはいきごふしなり

時に

文政十三年庚ごら霜月下旬

藤原宗忠

(宗家所藏 色紙)

おしむへし去年迄人のちようほう

成こよみ春夏たちて秋風吹冬に成
 れは今少の人の用ひ最早今年はむ
 かしとまた今年の若こよみごうつ
 り遷りし年月もいとおしまるゝ世
 のならい是ををもへは何とも只今
 日そ大事也ゆるし給ふな人々よま
 た來ぬけふの日の光り明日はあれ
 ともけふの日のふたゝひ來ぬとお
 もへはたゝけふのおしむへし其何何時
 まてもかはらぬは月と日の御姿我
 身の上を思へは竹馬に乘し其昔誠
 に昨日かおこつひとたゝ夢のやう

におもはるゝ是をゝもへは音に聞
 うらしまごやら龍宮へいたり給ふ
 三百歳の立行をも三日ほにかほにこおも
 ひしも尤なりし次第なり

(宗家所藏 本所の中に)

指當るとのみおもへ人はたゝ

去年のこよみ約役にたつまし

(同 表紙に)

五

執行口の心をよめる

向ふとみな御影かごおもひなは

ねてもさめてもありがたひかな

成こよみ春夏たちて秋風吹冬に成
 れは今少の人の用ひ最早今年はむ
 かしとまた今年の若こよみさうつ
 り遷りし年月もいとおしまるゝ世
 のならい是ををもへは何とも只今
 日そ大事也ゆるし給ふな人々よま
 た來ぬけふの日の光り明日はあれ
 こもけふの日のふたゝひ來ぬとお
 もへはたゝけふのおしむへし其何何時カ
 まてもかはらぬは月と日の御姿我
 身の上を思へは竹馬に乘し其昔誠
 に昨日がおこつひとたゝ夢のやう

におもはるゝ是をゝもへは音に聞
 うらしまごやら龍宮へいたり給ふ
 三百歳の立行をも三日ほとほにほとこおも
 ひしも尤なりし次第なり

(宗家所藏 本曆の中に)

指當るそのみおもへ人はたゝ

去年のこよみ約役カにたつまし (同 表紙に)

五

執行口の心をよめる

向ふとみな御影かとおもひなは

ねてもさめてもありかたひかな

藤原宗忠

時に天保九年戊戌閏四月廿八日九
ツ時前に詠

常に此歌の心に居申候時は易に



二又心持様にて前々漸に宜敷に

向也

有かたしくく

(黒住正三九所藏)

六 一大病のたすかりしおんわする事

一家も命も助りし恩をまた忘る事

一かいひやくい改開已來始ての道をつふす事

一天照太神の御道を悪悪厂のためにつふす事

右之つみの次第

一心をみだし俄に命をおごす事

一たいせつなき家るを二軒つふす事

何事も心のまゝに成物を

ふちごしりつゝふちに入なよ

何事も少時節を述述給へ

たごへまよひも心次第に

(船木甚兵衛所藏 軸)

七

借用申銀札之事

一札銀六百目也

但し利

右者無據入用に付借用申事實正明白也然る上者當七月
中に元利共御返辨可申候爲後日證文一札如件

天保十亥二月

黒住 左京

大森武介様

(花押)

(鈴木敬二所蔵)

索
引

凡 例

一、索引は歌文集に編章、節目等の編次なき爲めに、讀者が必要に應じて、直ちに需むる所のものを見出すに困難なるべきを思ひ、記憶せられ易き特殊なる語句を摘出して、其頁數を示し、之に依りて、讀者が記憶に任せて、所要の御歌文を探り、進みて御道の眞趣を研むるに便ならしめんとして、作りたるものなり。

二、御歌は題目、言葉書中の主要なる語句、及び御歌の各句を悉く網羅し、御書翰及び雜に於ては、主として、教義に關する語句、例へば「天照大神」「道」「生」とうし、「天命」「心」等を抜き、併せて、類句順に排列したり。

三、類句順は五十音圖に従ふ。但し「る」「る」「を」「は」「の」「お」に合せ、「い」と「よ」し、「よるす」の善等假名遣の誤りに屬するものは「い」と「よ」し、「よるす」等正しき方の後に加へたれども、表音に依りて探ぐるの便を計りて、必ずしも一定せず。又字音假名は表音を主とし、「好男子」も「かう釋」も口釋と共に「この部に屬せしめ、「妙」は「み」の部に入れたり、唯「元」「且」「寛山」「會」の類は尙正し

きに從ひて「くわ」の部を立てたり、他は推して知るべし。

四、語句の抽出に就いては簡短ならん事を力めたるが故に「我元の姿」とあるを「元の姿」のみとり、御はら立は御無用を「はら立は御無用」とし、「足らぬ事はあるべからず」「御不足は無御座候」などは「足る事を知る」と一つにし、「大風にて舟もみとんに相成候云々」と兒島よりの歸途志賀淳平倅の難義に關して御蔭の顯はれし事を書き給ひし段をば單に「難船」として擧げ、別に「志賀淳平倅」の語をも擧げ、又人の病の癒りし事、婦人の髪を延びし事などは「人の病」「婦人の髪」として擧ぐるの外「靈驗」或は「禁厭」等の語に依つて現はしたるもあり。

五、「生死」は「しやうし」ともよみ「せいし」ともよみ「いさし」ともよまる、が故に、人々にて異なる讀方をなすべし、其一を引きて見當らざるときは又他を尋ねべし。「元旦」を「げんたん」とよむも此類なり。

六、「天照大神」に關しては「天照る神」「天照る御神」「天照大神様」「日の神」「日の丸様」「天照皇大神宮」など種々なる御名を擧げたる如く、道に關しても「御道」「天照大神の御道」など別々に抽出したり、其心して引試むべし。「天照大神の

御分心」「御分心」と二つにし、「人の靈」「靈」「天地の妙」「妙」と各々擧げたるも亦此類なり。

七、古歌門人の歌俳句も亦各句を悉く擧げたり故に例へば「大空の」と云ふ句のみを記憶して、他を忘れたる時、索引に就きて尋ねれば「大空の二三二四二五、六五、三〇三」と見ぬて、教祖の御歌ならぬ三〇三頁の「ありなしの心を捨て、大空の色なきを我心ともかな」をも知る事をう。

あ

赤子をひろひ候まゝ、
 赤子となれば
 明りは入可申
 悪をさる一
 あくをさる年一
 悪トさいなん
 悪はさり
 悪はさる
 悪魔
 悪魔成けれ
 悪も善も
 わけはの
 朝かほの
 朝日なりけれ
 朝日にむかひ
 悪敷跡は善事
 足いらす

あしき事
 悪敷事をば
 悪敷事も取成にて
 明日は知られず
 あたへ給ひし
 東の末も
 東のはても
 あつまの道は
 東へたひ立給
 あつまもこも
 あはししまやま
 憐れ成ける
 憐れ成けれ
 わはふ成けれ
 雨具
 天津神國津神
 天照らす
 天照御神
 天てる神と
 天てる神の

あまり深山の
 天か下をも
 天地と
 天地に
 天地の
 天地の有かた
 天地は
 あら嬉し
 あら面白や
 改玉の
 あらはすものは
 あらはれし
 顯れにけり
 蟻が天地
 有かたひくにて
 有かたひにて
 有かたひ
 ありかたひかな
 有かたひなり

ありかたき二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇
ありかたきかな六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇
有かたき事ありし二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇
難有事を不忘三三
難有事取外ぬ様三三、三四
有かたきのみ一六、一七、一八、一九、二〇
難有をゆるさぬ二六、二七、二八、二九、三〇
難有面白三三
難有面白く相暮三三、三四
難有日々相暮三三、三四
有かたし三〇
有かたや一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇
ありて迷はぬ三〇
ありとおもふ一〇
有りと思ふは三三
有とは知らで三三
有りと見て三〇、三一、三二
ありなしを三三
ありなしの三〇、三一
あるころ己が三〇

有予尊と三三
あるなきの三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇
あるにまかせて三六、三七、三八、三九、四〇
ある人は三六
有ものを三六
有物と三三
有るものは三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇
ある夜夢によめる三六
いかす二七、二八、二九、三〇
いかすこと大一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇
怒りは御出し不被成二八
いさかへりたる二八
いささへすれば二八
生死を二七
いさしには二八
生死も二八、二九、三〇
生とふし一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

いさどふしころ六
いさどふしなり五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
生とふしの所一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
生きめされ六一
生物七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
活ものを二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
いきものは二九
いきらるもの六一
生る人ころ二七
いくすゑなかく二八
幾重もか、れ二八
池田家二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
醫者又のりくら二九、三〇
伊勢一三
伊勢御祓三〇
伊勢參宮心覺四七
伊勢とこ、とは三三
伊勢両宮様御祓三七

いたつきはなし三〇
いたましむるな三〇
一物もなし三三
一陽を御まし三三
一休禪師法語三三
いつくに行くと二七、二八
一切有物は無もの也二七
一心三一
一心を御すへ可被下三三
一心のゆうする事二〇
一心は同御事三三
一心は立候や三〇
一心亂れさへ不仕三〇
一鉢一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
一統の陰氣三三
いつまでも二七、二八
いつまでもかはらぬは月と日の御姿三六
出る日を三六
古しへも二七

命をおとす事三六
命ころ三三
命としらて三三
命なるらん三三
命のみちを三三
命の本の三三
祈りの場所三三
いのる心は三三、三四
家を二軒つふす事三六
家も命も助かりし恩三六
家本の義に付三三
今こ、と二七、二八
いまこ、に三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
いまこ、も六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
今予とりぬし二〇
今に替らぬ三三
今の嵐の三三
今までをしき三三
今村氏の九十の賀三三
今村宮二九、三〇

今村講三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
今もひかしも三三
いまより後は三三
陰氣三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
いんさかつ時は穢なり三三
陰氣くしけ三三
いや高さ三三
色なきを我三三
うかみ候事をうのま三三
うき事は三三
浮世ろと三三
浮世成らん三三
うきよなれど三三
憂世の有様一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
うきよのくもは二八
霧さ、ぬ三〇
右近殿の歌三三
疑ひ御晴し二八

うたかひをはなれ 三〇〇、三三六、三〇〇
 うたかひまことにはなれ 三〇九
 うちとおもへば 六
 うちと成るらん 三三
 うちなれば 三九
 うちにころわれ 三三
 内に住らん 三三
 うちにろ有りける 九
 移るすかたを 三三〇
 移るらめ 三九
 上様御凶事 三三九
 うまれ来て 一八、一五、三〇
 生れす死なぬ 二二、三三
 生れなからに 四八、六八
 海あれば 三九
 生みの子よ 三〇
 有無 三九
 有無をはなる、一〇九
 有無をはなるれば直に神なり佛
 なり 二四八

うむをはなれし 三〇
 有無生死 二二
 有無生死のば 三九
 有無の山 三三、三〇、三三〇
 うむもしやうしも 二二、三三
 運をろへ給ふ 三三
 梅の宿 三〇七
 うらしま 三九七
 卜者 一七三
 うらめしきかな 三九七
 嬉敷 二六、三三
 嬉敷事の 三三
 嬉しきと 二五、三〇一
 うれしきも 三〇
 易 三三、三九八
 るた葉にともす 四八、六八
 縁談義御取向 三三一

お、を
 御生かし 三九
 御いれの處 三〇九
 御おはれ不被遊 二六三
 御かけ 三九七
 をかしき事をはべる 六三
 奥をたつねて 一〇七
 小串もて 三三九
 おくひよふ 二七、三〇九
 御心に年のより被成ぬやう 八三
 行 九七、一〇六、二二八
 をしへの道を 三三
 をしへは天より起 九、二二八
 おしむわれから 三三、六八
 おつるわはれさ 三三
 おとら昨日より相勝れ不申 三三
 おとらぬ程の 九
 おないとしなる 八
 おなし日の中 三三

おなし信の 六、三六
 おなしみちなり 三三
 同しよを 三三、三三
 鬼 三三
 おにと知りつ、 三三
 鬼のかたろで 三三
 おにのねぶつに 三三
 鬼も邪も 三〇、三三、三三
 己か心と 三三、三三
 おのか心に 三三
 をのがご、ろのか 二二
 おのが姿と 三三
 尾上 三三
 己に勝ちて神と一跡 三三
 己の氣に随はざる様 三三
 御初穂銀一封 三三
 御祓 二六、三三
 老初のはる 三〇、三三
 御日待 三三、三三、三三
 老やわすれん 三三

おふけなく 二二
 大海の 三三
 大坂 三三、三三
 大空の 三三、三三、三三、三三、三三
 大はらひの時よめる 三三
 大御神の御歌 三三
 大やまと 三三
 おぼら敷不思召 三三
 恩 三三
 御にくみ申 三三
 御任せ 三三
 御道 一〇九
 御みくト 一七三
 御病 三三
 おもかけを 三〇
 面白さが天照る御神の御心 二二
 面白さかな 六、三三、三三
 面白にて相暮 三三
 面白き世に 二二
 面白難有 三三

面白嬉敷 三〇一
 面白暮し 三三
 面白や 三三
 おもはくと申物は 三三
 おもはざるかな 三〇
 おもはぬはろふ 一八、三三
 おもはぬ程に 一六
 おもひしに 三三
 おもひとくころ 三三
 思ひなば 三三、三三、三三、三三、
 一三三、三三、三三
 思ひわくる予 一四八
 おもふ憐さ 三三、三三
 おもふうれしき 三三、三三
 おもふ思ひも 三〇
 おもふ心予 三三
 思ふ事 二六
 おもふは別れ 一八、三三
 おもふ人々 一六八
 おもふまト 三三

おもふ我身は二九五
親九〇
親子兄弟成とも致方無三三二
親様次第第一七三
おやの心を九〇
及ふまし三三
か、か
我意に落ち候二七一
かいひやく已來始めての道二九八
か、る嬉しき二二二、二二六
か、るおトひの二六
か、る賢き二六
か、る樂しき二二二
か、る目出度二七、二二八
限り知られぬ七、二二二
限りなき命へ
かきりなき身と二六
かきりなく二二

かくなれば三三
かくのごとくろへ七
重ねし年も三三
重ねたまへよ三三
かしたき人の二九
かしたくも三三
かしてけれ一七一
敷のはらひよめる時の歌に二
形八三、八六
かたちある中は三〇
形をば病にまかせ二二
形の上の禁二九
形は無御座どの神闕三三
形は難有三三
形は皆にこり也二二
形もどくも七
かつて次第の二二
家内之爲御見廻三三
かなしきもまた三三
かなしみもせず二二

かなしむうらと二二
叶はねばころ二八
かなひなば三三
かのふゆは三三
河上氏御老母道の歌三三
かわらさらし七
かわり給ふなハ
神風や三三
神とい、三三
神となる三三
神のいかき三三
神の生出す三三
神のか、みに三三
かみの心に三三
神のます三三、三三
神のみうち三三
神の御心三三、二七、二〇、二九
神の御徳を三三、二五、二二
神のみとくに三三、三三
神の御とくに三三

神のみはらに二六
神の宮居に七
神はうちよれ三三
神佛三三
神諸どもに七
神や佛に遠くなる一〇七
神世のも、の三三、四二
神代も今も七、三三、六三
からてんしくと三三
唐も大和も氣の付かぬ事三三
さぎ
祈願一八六、三〇七、三〇八
き、給へ人二三
き、つれを三六
聞からに二二
きく時は三三
きくにつけても二六
來らすさらぬ三三
昨日の花三三

きのふはすする二二
昨日も今日も三三
君一七七
君東におもひさ給ふ七
君あつまへおもひさ給ふ三三、二八
君東へ行給ふ三三
君がまことの三〇
君が行三三、一八
君か世の三三
君にひかれて三三、四二
君にゆづりて三〇
君の光りは七
君の上はひは二二
君は東に我は吉備にて三三
君はかりなり二二
君ゆへに三〇
奇妙六九、一三三、一五八、一六九、二一八、二二四、二二八、二五七、二五九
金三三、三六八、三〇〇、二二二、二二二、二二二、二二二、二二二
金銀一切望むの不殘蛇なり二二

銀談三三
清き流れの三三
去年のこよみ三三
く、く
愚妻祝年三三
口はかりにて二二
苦に成三三、三三、三三、二二
くにもせはにも二二
苦のとうとう二二
くはれぬるかな三三
雲きりは三三
雲居にひかる三三
くやしさを三三
くらさに入よ三三
閻より三〇
苦樂は勝手三二
暮す心は一八
苦しからまし三三
くるしむ人三三、二、二六

會 七三、八四、九三、一〇八、一二三、一三三、一四三、一五三、一六三、一七三、一八三、一九三、二〇三、二一三、二二三、二四三、二五三、二六三、二七三、二八三、二九三、三〇三、三一三、三二三、三四三、三五三、三六三、三七三、三八三、三九三、四〇三、四一三、四二三、四四三、四五三、四六三、四七三、四八三、四九三、五〇三、五一三、五二三、五四三、五五三、五六三、五七三、五八三、五九三、六〇三、六一三、六二三、六四三、六五三、六六三、六七三、六八三、六九三、七〇三、七一三、七二三、七四三、七五三、七六三、七七三、七八三、七九三、八〇三、八一三、八二三、八四三、八五三、八六三、八七三、八八三、八九三、九〇三、九一三、九二三、九四三、九五三、九六三、九七三、九八三、九九三、一〇〇三

寛山先生 一三三

元旦の御祈禱 二〇五、二一三

元旦の御札守 三三〇

け

けかす人ころ丸

けがれ 三三三

穢れなり六三

けふころは 三三

けふにもあるかな 二

けふの夢とは 三三

けふはまれなる 一〇

けふよりは 三三、三三

く、ひ

御一昧 一三三、三三〇

好男子一人有 三三〇

口釋 八六、九三、一〇九、一二三、一三三、一四三、一五三、一六三、一七三、一八三、一九三、二〇三、二一三、二二三、二四三、二五三、二六三、二七三、二八三、二九三、三〇三、三一三、三二三、三四三、三五三、三六三、三七三、三八三、三九三、四〇三、四一三、四二三、四四三、四五三、四六三、四七三、四八三、四九三、五〇三、五一三、五二三、五四三、五五三、五六三、五七三、五八三、五九三、六〇三、六一三、六二三、六四三、六五三、六六三、六七三、六八三、六九三、七〇三、七一三、七二三、七四三、七五三、七六三、七七三、七八三、七九三、八〇三、八一三、八二三、八四三、八五三、八六三、八七三、八八三、八九三、九〇三、九一三、九二三、九四三、九五三、九六三、九七三、九八三、九九三、一〇〇三

かうしやく仕跡にて御益 三三三

こへぬれば 三三、三三〇、三三〇

古歌 七六、一〇七、一八三、二六三

御開運 三〇九、三二七、三二九、三三三、三三七

國恩 三三八

極御内之一件 三三三

こくらくも 三三

古語 一九六

爰々安樂 三三、三三〇、三三〇

爰々極樂 三三

爰々高天の 三三、三三

爰に一首うかみしま、二〇

こ、に來て 三三

こ、を知るころ 三三

心 三三、三三、三三、三三

心明なる時は 三三

心いかにも廣く 三三

心いで 三三

心をいけて 三三

心を御すへ被成 三三

心を下腹にしつめ 二七

心をすて、 三三

心をふさぐ 三三

心をみたし俄に命をおとす 事 三三

心

心を養ひ 三三

心を養ふ 三三、三三

心形 三三、三三、三三、三三

心神に成候へば則神也 一三

心から 三三、三三、三三、三三

心から生さるへ仕候得ば 三三

心から一陽を御まし 三三

心からして 三三

心くもる時は 三三

こ、ろくるし 三三

心こくらく 三三

心ころ 三三、三三、三三、三三

心次第に 三三

心すみ渡る有難 一七

心樂しき 一〇

心とは 五〇

心ともかな 三三

心なり 一〇、一三、一〇、一三

心なりけり 三三、三三

こ、ろなりけれ 一三、三三、三三

心なる 三三

心に予ある 三三

心にちりも 一三

心にはつる事無時は則神也 三三

心に先三十日と思ひ 三三

心のありか 九

心の雲の 三三

心の雲も 一七

心の姿 三三

心のま、に 三三、三三、三三、三三

心の向方 三三

心の用ひやう 一〇

心のやしなひ 一三

心は有かたくも天照大神様 三三

こ、ろはおなト 三三

心はおのが 一〇

心はかりに 三三、三三

心はこ、るなり 二

心は十九や 六

心はみやの 三三

心は寛々と 三三

心ひとつに 三三、三三

心一つの 三三、一〇

心一つのきはめ 三三

心一つの用様 二

心一つ開くれば 三三

心一つを 三三

心はどすつの事 一三

心はどの世を経る 一三

心まかせに 三三

心も形も 三三

心もすて、 三三、三三、三三、三三

心もすてよ 三三

心安く暮し候ころ 三三

心やすさよ 三三

心ゆるさず 一〇

小しまく 二

兒島へ参り 三三

五社参 一〇

五十の卵も少の厄 三三

御腫物 三三、三三、三三、三三

御託宣 三三

ことしより 三三

ことろかし 三三

ことろなし 三三、三三

ことどの嬉しさ 三三

ことのみ思入 三三、三三

こと葉の玉の 三三

小供の心 三三

小供のま、ことの様 三三

事をとらば得べからず 三三

此國の自然の天のをしへうくる 事 三三

此頃も 三三

このさとも 三三、三三、三三

此世界我心の内におり

御入札 三三三

此世の花を 〇〇
此 一つにて 一〇〇

御分身 三三三

こひしかるらん 〇〇

戀しくて 〇〇

今日が大事也 〇〇

金毘羅様 一〇〇

これぞ浮世の 一〇〇

是ほどに 〇〇

ころさぬやう 七三、七七

歳旦 三、八

先は遠くなるもの 〇〇

先をからさぬやう 〇〇

酒醬油 〇〇

指當る 〇〇

さてろの中に 〇〇

さとりなるらん 〇〇

さどれば其心神なり 〇〇

参宮 〇〇

参籠 〇〇

さめたる人の 〇〇

さめなん事の元 〇〇

覺やらす 〇〇

申のどしはしめてよめる 〇〇

さる人書物に致し 〇〇

四海兄弟 三三三

志賀淳平作 〇〇

死するものなし 〇〇

死生 〇〇

自然 〇〇

自然を御待ち被遊 〇〇

自然と一跡 〇〇

しせん風の風 〇〇

自然の大執行 〇〇

自然の天命 〇〇

自然の道 一〇〇

自然之利 〇〇

下腹に御心をしつめ 〇〇

日月 〇〇

日月様へ打まかせ 〇〇

日月様を親様と思ひ 〇〇

日月は一跡 〇〇

日月より出たる道 〇〇

志津摩殿 〇〇

死と申事はたへてなき 〇〇

死に越く時の歌にはよろしく 〇〇

しにともなくば 〇〇

死るはかり 〇〇

しぬる人ころ 〇〇

死る物なし 〇〇

試筆 〇〇

しはみぬるかな 〇〇

信心 〇〇

しんしんの心をよめる 〇〇

信心はいんきなりなり 〇〇

神水 〇〇

神水の徳 〇〇

神道者 〇〇

神徳 〇〇

神符 〇〇

神佛 〇〇

神明次第 〇〇

神文 〇〇

神用口待 〇〇

邪陰をはなれ 〇〇

借用申銀札の事 〇〇

邪智をすて 〇〇

邪人は當時致方なきもの 〇〇

邪の中 〇〇

邪はあらはれ 〇〇

邪は正の元 〇〇

執行 〇〇

執着 〇〇

執行が大事 〇〇

執行口の心をよめる 〇〇

しゆきやう成らん 〇〇

執行の心 〇〇

酒湯 〇〇

小道に御寄被成間敷 〇〇

正直 〇〇

小子年賀 〇〇

トやうはらひ 〇〇

書物 〇〇

知らで今まで 〇〇

しらでうき世に 〇〇

しらぬ浮世の 〇〇

しらぬつくしの 〇〇

知りなから 〇〇

知るとおもへば 〇〇

知る時は 〇〇

知る人は 〇〇

す

姿をはなれ 〇〇

姿と申者は 〇〇

姿なき 〇〇

姿なり 〇〇

姿なれ 〇〇

姿にて 〇〇

すがたに迷ふ 〇〇

過しおしさよ 〇〇

過たるは不及 〇〇

すぐに行ころ 〇〇

少時節を 〇〇

す、む時は甚あやうさ 〇〇

捨てぬれば 〇〇

すてまほしさよ 〇〇

すてんと思ふ 〇〇

すます 〇〇

住家なりける 〇〇

すみか成けれ 〇〇

すみかならん 〇〇

すみながら 〇〇

入ぬれば三八
 すみよかるらん一六六
 住吉大明神の御神詠一七七
 住むとおもへば一八、二九
 住時は三五九
 すむ人は六、七、二、二二
 すめる活もの三三
 水火八一
 末と思ふ五五
 末なれ五二

せ
 生死九九、一七〇
 生死の海を三九、四〇、三三〇
 井水五八
 正はかくれ一六〇
 歳暮三
 正をます一九九
 世界をにきる六五
 世界なりける三〇

世界なるらん三九、四〇、三三〇
 せまき心を元
 善悪九二
 善悪ともに三三
 善悪共に天命三九
 仙石家一九九
 千里隔り候ども同日月二七三

そ
 草木三九八
 足痛三六一、四八三
 其ありなしの三
 其心をも五五
 其一もつを三六八
 ろの日ととも一八
 其の日中に一九、四八、三三九
 其の日本に二
 其日の本を三〇
 其道を三三
 ろの水上は三

ろのやまを二
 空にころすめ三八
 ろらにすむ六
 ろれては天がゆるし給はず五

た
 大悪日五七
 大安樂なり三六
 大事五〇
 大事とおもふ五〇
 大事なきなり五〇
 大小のくちなは一四
 大小の事二二
 たいせつなる家九
 大切にせよ五八、六〇
 大道三〇二
 大道明かに相成三〇
 大道は天地一ぱいなり二八
 大徳と云ふ一七
 大難三〇

大發しにて三三八
 大病のたすかりし恩三九八
 たをいのるころ三
 高天原一四三、二六二、二六六
 薪木四二七
 たくひなき三三九
 たすけられては三三
 た、有かたき四七
 た、天地に六三
 た、天地の五五
 た、樂みの五五
 た、一筋の三六
 た、よふ魚三三九
 立寄て三〇七
 たつた一あし三
 たつた一つの九、三三、四四、五八、六六、
 二五八
 たつぬるにまた六二
 尋ぬれば九
 辰巳の平六一三三

たどへまよひも四九
 樂しかりけれ三三六
 樂しき三三一
 樂しみ七、九、二〇、二八〇
 たのしみ暮す一七、二六一
 樂しみにして五
 樂はかつて次第三三
 樂しみ四〇
 樂みふかき三〇、三三
 たのしみも五
 樂しみもなし四七、五〇
 たのしむも三
 樂もしきかな元
 玉か、み一〇七
 玉子九三、九四
 靈七三
 玉たすき三三〇、三三二
 だんト一三六、二二
 たもつとも五
 たらぬ事ころ四七、一六〇

ち、ち
 足る事を知る六、一〇、一六、二九、三九
 たるまぬやう二七七
 他か浮世を三二
 たれか別れを二七

ち、ち
 智が邪魔になり一六二
 地獄なり五
 ち、の願ひも五
 ち、の願ひも五
 千早振七、三三、三三、三九、四八
 ちんばな三落か、り
 茶屋町長次郎二九
 晝夜せかまれ三三
 長壽を御たもち三三二
 散はやちれよ五七
 散るろはかな三
 散るども千世も六〇
 智恵一〇七
 智恵をすて、三〇八

智恵をはなれ 二六四

つ

造ひなば 三三

つきすまト六〇

つきせぬ花を六〇

つきせぬ道の 五七

月と日の御姿 四九六

月に村雲 一八四、二八三

月は入 四四

月はくまなき 六

月は誠の 三〇八

月日とともに 二五四

月日の立つも 二七二

つ、しみ 一七三

つとめても皆 三六五

常の道 三三八

つまらぬと奉存候へば誠につ
まらぬ 二八四

五三三

露霜に 四四
つるやかめにも 二
追啓 三三三

て、で

天 九〇、九二

天下に一番と申人 二六八

天心 二二

天心説 一八

天心の御志 三六〇

天社日 一四

傳受 一〇三、一三九、

天照皇大神 二五三、二六〇、二九五

天照大神 三七、五八、五九、七六、一〇五、

二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、

天照大神御開運 二六七

天照大神様 一八〇、二〇〇

天照大神様を思出し 一四四

天照太神様の御影 二五〇

天照太神様へ御縁深き 二四六

天照大神様へ奉申上 三九二

天照太神と御一跡 一九三

天照太神と同魂同跡 三九四

天照太神の主の心と一つ 四九四

天照大神の御道 一〇五、二六九、四九六

天照大神の御分身 三三三

天照大神のはら 三七六

天照大神の御心也 二五六

天照大神の御心に叶 二二四

天照大神の御心をいため 二二〇

天照大神の御心をけかし 二二二

天照大神の御玉 二九六

天照大神へ御任 二五七

天照大神我一心に現はれ給ふ 三六一

天道様へ御任 三三三

天道まかせ 三三一

天地 七九、九〇

天地一跡 七六

天地君親 一七七

天地御國恩 三九八

天地自然之利 二六〇

天地に打まかせ 二二二

天地にまかす 二二二、二九三

天地の子 二二

天地のもの 八八、九七

天地のをしへ 二二二

天地は生物 七五

天地は満るをかく 一七二

天に御任 二七八、二八〇

天に任 七四、九〇、九五、一〇四、一〇九、二二二

天に任せし 四七

天の産給ふ玉鏡 一〇六、一〇七

天の子 二二

天の心 三〇九

天のたすけ 一〇六

天の時 一〇六

天のなし給ふ處 三三三

天のなすのど 一五五

天の光りの 二二

天の御心 三九八

天の道 二二

天地のむすびし心 三〇九

天のものなり 三九五

天のわれ 三九五

天は則無 八八

天へ御任せ 二七二

天保五年 二二

天命 七五、七八、八四、九〇、一〇一、一〇二、一〇三、

一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、

一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、

一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、

天命を樂む 二二六

天命をへたて候 一六一

天命打まかせ 一八八

天命次第 二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、

天命に相任 二二二

天命に打まかせ 二〇三

天命に御任 一五九、一六八、一八六、二〇五、

二二二、二二六、二二七、二二八、二二九、

二八八、二九一、三〇二

天命に任 一六二、一八〇、一九四、一九五、一九六

天命之難有き 三三二、三三三

天より執行被仰付 三〇〇

天よりの御影 一六三

天よりの執行 一七六

天よりをしへをなながら 一三三

てらし給へよ 二六

寺などは大耻入 二二九

照り渡るもの 六二

道具や 一三三

冬至 八五

冬至御守 三三二

冬至をまかへに 二二〇

徳 三三三、三三二

とくは心の 三三三

とく道を 二二二

時には神が 五二

時の至らぬ 二二四

五三三

はらもふくれず六三
はらを立てず 三三三、三三六
はれわたる七
はれ渡るとき 三三三
はるうなり七

ひ、び

ひをかりて見る 四八六
日を知らす 四八六
日かけまつまに 三
光り成けり七
日ことくく七
七ヶ條の御心 三二
一口に六三
人こ、ろ 四、二七、四八、四九五
日月こ、ろ 三三
人さと遠く 一〇七
一すトに 一四
人ろ一とく 一七
日月つなるらん 三三、三八

ひとつになれば 四、二七、四九五
人となりぬる 三三
人なれば 三三、四七
人にさつのかぬ様 三三
人の憐さ 三三
日月の生みたる 三三
人の心 六
人身上 三三
日月の恵の 三三
人の病 三三
人はたゞ 四、四七
人者日間にては宜からず 三三
人はまた 四九五
人々の一心により 一五
人々を 一六
火にさへやけず 三三
日の今いつる 四
日の御神 九
日神御一跡 三三
日神様へ御拜 一六

日神様へ御禮 三三
日神と我心を一つにして 三三
日神の御徳 一〇
日の善悪は 五七
日丸様に御任 元五
日の本に 四八、五
日は今出る 四
日ははや出し 四
日待 八、八七
日待こしらへ 三三、三三〇
病人力を落候 三七
ひろき世界は 三六
廣き物かど 三三

ふ

風邪にて 三七
不快御見舞被遣 三二
福田氏 二
福もひんくも 三
不思議 一七

婦人の髪 光
不生不滅 六〇
ふたつなければ 三〇
ふちと知りつ、 四九
ふちに入なよ 四九
二日神前に向ひ 一七
ふみ分けるむる 三
分別 一六、三三
分別は少も入用に無 三二
分別を取外 一六
古田氏 八、九、一〇、一一
古田氏卯三郎な 一〇
不老不死 七、一六

へ

へたつれど 二七、二八、三三
へたてなければ 三三
へも 一三

ほ、ぼ

ほかに心の 一〇
外にはあらず 四〇
はつ句一首 三〇七
法華宗 九
北國筋 三九
佛 六
佛といふも 三三
佛にも本来無一物 三〇
本跡の生物 六
ぼん人の常 三三

ま

毎朝御目にか、り候積りに日拜
仕候 三二
毎朝東に向ひ 一六
毎夕之日待 三三
まかせなば 三三
まかせまつりし 三三
誠 九、一〇、二、一三
まことを行は 三

信とは 四九

誠なりけれ 一五、一六、二〇
誠にありかたき事 二
まことの心 三〇
まことの玉 一〇
誠の中に 一、二、三
まことの中の 三六
誠の人 一三
まことの本跡は 三三
誠の道を 三三
誠の道をはなれたる人 三三
誠はかりて 二
まことばかりに 三、四、五、六、七、
二五
誠は丸事にて 二五
誠一つ 元一
まこと一つで 三三
誠は 三三
まさるとし 三
まさるめでたさ 一

禁厭 二五二、二七〇、二七三、二七九
ましますに 二五三
ますか、み 三三三
またおほるなり 三三七
また面白き 一〇一、二〇二
また思ひ直して一首 五七
又苦むも 三三
また此歌に迷ひ給ふな 一〇
またすつるども 五五
またたらぬ 一〇四
またたらぬと 一〇五
またたらぬとて 一〇四
またまよひけり 二五三
まつもるどもに 二五二
魔のさす物也 三〇一
廻會日 三二七、三三三、三三九、三四〇、三五一、
三五四、三六〇、三六七、三七一、三七八、
三九二、三九七、四〇〇、四〇六、四一〇、
四一六、四二二、四二九、四三三、四三七
まんトぬやう 二五五
まん心 一四四、三〇八
まんしんの門人 三〇七

迷 一三二
迷ひころ 四九
まよひなければ 四七、五〇
迷なり 五〇、三六一
迷ひにて 五二
迷はせ 四七、四九
迷より 五〇
迷をされば 五〇
迷ふ憐れさ 三九
迷ふなよ 三
迷ふ人々 四六
丸き難有事 三九三
まるきうち 二
丸き御神なり 三三七
まるき御神に年はより不申 三九三
丸き心を 三九三
〇き中なり 二七、三六、三九
まるき中に 三九三
〇き中に住 三二
〇きに奉任候也 三三七

丸まかせ 一四四
み
みうちなるらん 三三
みをしへは 二六
みおしへを 二六
身を身とも 一七八
みかく心の 二九五
右之罪の次第 四九
みちを備ふ 一五、一六、二〇
みくト 一五七、一七三、一八二、二〇三、
二〇、二一一
身ころ安けれ 一七、二〇、二六一
御寶を 一〇
三度まで 四九
道 九三、九七、一〇一、一〇五、一〇六、一一一、一一四、
一一八、一二二、一二七、一三八、一四九、一五〇、
一五八、一六七、一六九、一七九、一八一、二二四、
二二五、三〇六、三九八、四九九
道を願はん 五二
道を外れ候ては則座にふちに

落申候 二五三
道をはなれ給ふ時はあやうき
事なり 二五七
道執行の時 二五
道則天照皇太神 二五三
道直に天照大神なり 二五三
みちてかけぬやう 三三五
みちとせに 五〇
道と申は天照大神なり 三三七
道なくば君の御家も君も無 三〇〇
道に入給ふ人 三〇一
みちに御まかせ 一五七、三〇〇
道に住む 三三三
道に住む事なり 三三七
みちにまよはぬ 二二、二五三
道に迷ふ人 三〇二
道に行なん 四七
道の歌よめる中に 九、一二、三三、三六、
五三、六四
道の心 二二〇

道のども 八
道のはしめに 三二
道の道 三〇八
道の元入 三〇〇
道の元なれ 六三
道のをしへを 三〇
道は 三〇二
道はいさどしし也 三九三、三九三
道は至而勤安き物 三三三
道は一本の木の如く 八四
道は彌天照大神 三三三
道はかやうの所にて 四〇七
道は御一心の一つ 三三二
道は小子道に無御座 一三三
道は天の道也 三〇九
道は中を取 三三三
道は一つ 三六九
道は分別を取外 一六六
道は誠に難有もの 三三一
道は誠に勤安き物なり 三三七

道は〇きより外は無 三九三
道は満る也 三三三
道引かん 三二
道ひらきせん 三
道も 二二九、二三五、二六一、二六八、二九〇、二九
二、二九八
道も益はつし 三三六
みち渡るらん 三三
三つ子となるも 四〇
水にははれず 三三三
水のにこれる 三二
みつの社の 三九
満るをかく 一三三、一三七
満ればかけ 一八四
満ればかける 一三三
皆打ちすて 五八
みな打はらひ 三〇
みな嬉敷と 三〇
みな御影かと 四九七
皆己か物 四八、五〇

水上は 三
 みなさりはらひ 三〇
 みな末のよと 三三、六四
 皆樂と 二六七
 皆天道に 四九二
 みな天命と 七
 皆ふきはらへ 二二、二四、二五、二六、二七
 みな〇こと、 四九
 みな丸事の 五
 皆夢の世と 三
 身にかへりては 三三
 みねの月 三〇
 みねはおろか 二
 身の限り 三三
 身の樂しさは 三三
 身のつらさ 三三
 身の無き 六
 みはおはるども 五八、六〇
 見まはしよ 六一
 み、はかりにて 三三

身も我も 三三、三五、六五、三三六
 宮にて夢を見候 一四
 妙 九五、九七
 見る度に 三三
 む
 無 七六、八八、一〇九、三〇九
 無を少しはなれ 一四九
 ひかし尊き人のみ歌 三
 ひかしより 五
 無が過は不仕や 三〇
 向ふこと 一六七、四九七
 むかふものこと 三三
 無心の講釋 一三
 むすべるつみの 四
 娘義明日引渡し 三三
 ひちやくちやにて 七
 ひつかしく 五
 無念 三〇
 無念よりうかみ候事 三三

ひまれすしなぬ 七
 村雲は幾重もか、れ六
 無理のなきやう 一四
 め
 命心のま、一〇
 目付の第一 一〇
 も
 もふよるこばす 一四
 用ひやうなり 一〇
 もつな人々 三
 もつ人は 三三
 もつれなりける 三三
 元 三六
 本を御忘被成間敷 一七七
 本として 二〇、三
 本とせば 二〇、三
 もとの心を 五
 元の姿をたつぬる 六一

元の人 九
 元の道を忘れ 三六
 元は一つ 一九
 本は一つにて 二六
 もとめさらまし 二
 物ろなし 六
 物はなし 四九、六三、三三
 物を苦に不被成 三三
 粉種子 三六
 門人還曆 四〇
 門人中たりといへども思ふやう
 に参り不申 一三七
 桃の歌 四八
 も、の御歌 三
 桃の御神号 三九
 もる、事なし 二
 や
 厄難御凌御禮 三六
 やくに立まし 四七

養ふは 三九
 養ふ人 三六
 養ふ人に 三〇
 社 八五、八九、一〇
 やすく嬉敷 三
 八百萬神に祈付候 二
 病 九
 やまひくらの物其場にてなを
 る 七
 山もありつる 三
 ゆ
 雄次様 六
 行人は 七
 行道は 四七
 ゆめとおもはぬ 三
 ゆめとしれども 三
 夢になりとも 六
 夢の世を 三
 夢は迷出 一

よ
 陽氣 二七、三三
 陽氣ゆるむときは 三三
 世をくりける 二
 よき事 二七
 よき事をとる 三
 よき事のこやし 七
 よき事のみとりて 二
 よき事は 二七
 慾 七
 吉悪も 五七、五八
 よろに見て 六〇
 四つの道 九
 世としらで 二
 よに有かたき 三三
 世に出て、一七、一八、二八
 世に移る 三
 世におろろしき 三
 世におもしろき 七、八

世にかわゆきと思ふ人の姿はみ
な鬼なり六三

世にすめば一〇四、三三三

夜の明けたるごとくの事三〇八

世の中を五五、六〇、二四一

世の中に二九、四六、一六〇

世の中は五八、五九、一八四、二八三

世の中は滿ればかき一五三

世のはなは五七、六〇

よはひころ六一

よはひをば五〇

嫁引受三四三

悦ひは一四三

よるつのためから一三

萬世までも八、三一

萬代やへん五〇

よるすの善は四、五

よるひるもなく四八

よ渡る舟に二

ら

雷復の如くに二七

り

利銀三七九

両宮様御祓三四四

龍宮四九七

ろ

六月祓二〇六、三三三

六十の暮よめる三

わ

我一心の三二

わかひ人六一

若さも老も三〇、三三

我國のしんしんの心をよめる一五

我ころ三三、三〇、三三、三三、三三

我心も我身も天地のもの七

五三二

我姿六二

我ろの、六二

我樂みと五五

我朝になし四九

我どく所の道三三

我どく道に非ず三〇九

若殿様四〇六

我道は六二

我身を我身とおもふ一七

我身成るらん六八

我身には四六

我ものどては二九

別れども三

脇指之事四〇

わすれけるかな五

私齒も四〇

我をうし六三、六四

我ころみちの四四、

我ろたのしさ四〇

われたつね三三

五三三

我といふ六三、六四、二六八

われと云ふものなし一三一

我ど云ふものをはなれ三〇二

われとま道へ三

われ無に行三〇三

われ無道を三〇三

我なし三九、三〇九

我に明り入候と存候へば大成ま

んしんなり三〇八

我はた、三〇三

われ日の本に一八、一九、二〇

われはををしき六三

我も鬼なり六三

我も天地の子なり三三

われくと三九

御歌文通數一覽

備前國												國名	
上道郡	兒島郡	赤磐郡	市 山 岡					郡 津 御				郡市名	
松本慶次郎	笠原亮一	森文吾	長尾才三郎	黒田平吉	古田紀般	野崎在安	中西厚道	竹原與七郎	黒住正三九	長瀬猪真治	森住豊治郎	宗家	所藏者氏名
0	1	0	1	0	0	0	1	0	1	2	2	108	歌
1	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	1	8	道 の 部
0	0	2	0	0	0	0	0	2	0	2	2	14	日 用 の 部
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	8	雜
1	1	2	1	1	1	1	1	2	2	2	2	120	小 計
												合 計	

五七

伯 耆													
東 伯 郡													
河本長兵衛	桑田熊藏	山本貞治郎	船木甚二郎	村岡萬喜藏	石原平八郎	徳岡太平	峰地友藏	桑田勝平	桑田國藏	盛山百藏	四海太平	加藤萬吉	中井富吉
二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
五	一	六	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	〇
五	六	三	〇	一	一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
二	九	九	三	三	二	二	一	一	一	一	一	一	一
二五八													

五三九

美 作 國												
久 米 郡 田 郡 英田郡 勝田郡 眞庭郡												
田外源八	杉本多一郎	高倉久太郎	伊丹享	榑本榮治郎	森本藤吉	倉内嘉太郎	黒田龍男	有宗嘉四郎	桑村八郎二	甲斐駒市	船木甚兵衛	倉光必明
一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇	一
一	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五	一
一	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇	〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	〇
五	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一三三												

五三八

岐 讚			國波丹		國馬但		國 幡 因						
綾歌郡			何鹿郡		美方郡	城崎郡	鳥取市	八頭郡			氣高郡		
久米彦三郎	沼野歌太	木村茂太郎	大道宗三郎	大志万誠一郎	三好金太郎	辻三三郎	佐藤豐亮	依藤義馬	湯口早枝	尾崎藤次郎	萩原孫三郎	土師徹次郎	山名一二
0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
1	2	2	1	3	0	1	0	1	0	0	1	1	1
0	0	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	2	2	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11			4		3		6						

國雲出			國										國名
篠川郡	松江市	能義郡	日野郡	郡 伯 西								郡市名	
公田連太郎	本郷新助	秋間賢孝	近藤喜八郎	永見寛録	鷲見惣市	三島仁平	遠藤好次郎	長山六郎	益尾吉太郎	益尾徳次郎	藤本源四郎	廣田榮三郎	所藏者氏名
0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	歌
1	1	0	2	0	1	1	1	0	1	10	0	0	道 の 部
0	0	1	2	1	0	0	1	2	4	6	1	1	日 用 の 部
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雜
1	1	1	4	1	1	1	2	2	6	3	1	1	小 計
3													合 計

111

御歌文所藏者住所一覽

計 ヶ國 三	駿 河國	伊 賀國	攝 津國	安 藝國	伊 豫國		國			國 名	郡 市名	所 藏者 氏名	歌	書			雜	小 計	合 計
					越 智郡	國	丸 龜市	香 川郡	三 豐郡					道 の部	日 用の部	部			
二 五 六 郡	靜 岡市	阿 山郡	武 庫郡	安 藝郡	越 智郡	國	丸 龜市	香 川郡	三 豐郡	國	郡	市							
七 七 名	小 林 和 免 吉	鈴 木 敬 二	若 林 桃 天	辰 馬 悅 藏	竹 内 勝 太 郎	田 阪 庄 三 郎	長 野 恒 彦	石 井 寅 吉	杉 上 暉 信	小 川 兒 一									
一 六 六 首	-	0	-	-	0	0	-	-	0	-									
一 五 八 通	三	二	0	0	-	-	0	0	-	0									
一 七 七 通	-	一	0	0	0	0	-	0	0	0									
七 通	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0									
	五	三	-	-	-	-	二	-	-	-									
五 〇 八 通		二 五	-	-	-	三													

あ

秋間賢孝

出雲國能義郡飯梨村

有宗嘉四郎

美作國勝田郡北吉野村

い

石原平八郎

伯耆國東伯郡東竹田村

石井寅吉

讃岐國丸龜市本町

伊丹亨

美作國苫田郡津山町

ね

大志万誠一郎

丹波國何鹿郡佐賀村

か

笠原亮一

備前國兒嶋郡東興除村

加藤萬吉

伯耆國東伯郡矢透村

河本長兵衛

伯耆國東伯郡安田村

甲斐駒市

美作國真庭郡木山村

さ

木村茂太郎

讃岐國綾歌郡坂出町

く

桑田熊藏

伯耆國東伯郡倉吉町

桑田勝平

伯耆國東伯郡倉吉町

桑田國藏

伯耆國東伯郡倉吉町

桑村八郎二

美作國勝田郡北吉野村

久米彦三郎

讃岐國綾歌郡坂出町

倉内嘉太郎

美作國英田郡檜原村

倉光必明

伯耆國東伯郡市勢村

黒住正三九

備前國御津郡大野村

黒田龍男

美作國英田郡檜原村

黒田平吉

備前國岡山市野田屋町

こ

公田連太郎

出雲國簸川郡古志村

小林和免吉

駿河國靜岡市安倍川町

近藤喜八郎

伯耆國日野郡根雨村

さ

佐藤 豊亮 但馬國城崎郡西氣村

す

杉上 暉信 讃岐國香川郡宮脇村

杉本 多一郎 美作國久米郡埴和村

鈴木 敬二 駿河國靜岡市安倍川町

宗家 備前國御津郡大元

た

大道宗三郎 丹波國何鹿郡吉美村

高倉久太郎 美作國久米郡西川村

田外 源八 美作國久米郡佐長山村

竹内 勝太郎 安藝國安藝郡牛田村

竹原 與七郎 備前國岡山市天瀬

田阪 庄三郎 伊豫國越智郡日吉村

つ

辰馬 悅藏 攝津國武庫郡西宮町

辻 三次郎 但馬國城崎郡中竹野村

こ

徳岡 太平 伯耆國東伯郡倉吉町

な

長瀬 猪真治 備前國御津郡今村

中西 厚道 備前國岡山市二番町

長野 恒彦 伊豫國越智郡今治町

永見 寛録 伯耆國西伯郡富益村

長山 六郎 伯耆國西伯郡中濱村

中井 富吉 伯耆國東伯郡東志村

長尾 才三郎 備前國岡山市東田町

沼野 歌太 讃岐國綾歌郡川津村

ぬ

野崎 在安 備前國岡山市小野田町

野崎 在安 備前國岡山市小野田町

は 土師 徹次郎 因幡國氣高郡蒲野部村

ひ

廣田 榮三郎 伯耆國東伯郡竹田村

ふ

藤本源四郎 伯耆國東伯郡福米村

船木 甚兵衛 伯耆國東伯郡倉吉町

船木 甚二郎 伯耆國東伯郡倉吉町

古田 紀股 備前國岡山市東中山下

ほ

本郷 新助 出雲國松江市天神町

ま

榊本 榮治郎 美作國苦田郡津山町

益尾 徳次郎 伯耆國西伯郡米子町

益尾 吉太郎 伯耆國西伯郡米子町

松本 慶次郎 備前國上道郡古都村

み

三島 仁平 伯耆國西伯郡米子町

峰地 友藏 伯耆國東伯郡上中山村

三好 金太郎 但馬國美方郡西濱村

む

村岡 萬喜藏 伯耆國東伯郡市勢村

森 文吾 備前國赤磐郡高陽村

森住 豊治郎 備前國御津郡今村

森本 藤吉 美作國苦田郡津山町

盛山 百藏 伯耆國東伯郡伊勢崎村

盛山 百藏 伯耆國東伯郡伊勢崎村

や

山名 一二 因幡國氣高郡鹿野村

山本 貞治郎 伯耆國東伯郡逢束村

湯口早枝 因幡國八頭郡用瀬村

よ

四海太平 伯耆國東伯郡倉吉町
依藤義馬 因幡國鳥取市馬場町

わ

若林桃天 伊賀國阿山郡上野町
鷲見惣市 伯耆國西伯郡住吉村

ゑ

遠藤好治郎 伯耆國西伯郡彦名村

を

尾崎藤次郎 因幡國八頭郡小畑村
小川兒一 讃岐國三豊郡詫間村
萩原孫三郎 因幡國八頭郡河原村

御歌文の謄寫及び印刷に就いて

凡る諸種の文章中、書翰を以て其の難讀なるものの最となす。殊に久しき年所を經たるものに於て其甚しきを見る。蓋し書翰文は普通文といたく其體を異にするのみならず、早急筆をやるが爲めに、往々にして、誤字脱字を生じ、後人をして益々其判讀に苦ましむるを以てなり。我教祖の御書翰と雖亦此累を免れざるが如く、六十年前の書翰文と今日のそれとは、大に其體を異にし、今人の見て以て誤字脱字なりとするものも、尙當時にありては普通の用語たるものあり。例之ば「苦のとう」と云ふは「苦の土」にもあらず、「苦の堂」にもあらずして佛者の所謂「苦の道」なるべく、「八年の風も引不申」は「八年の間、風も引不申」ならんと思はるれども、別に「只けふの惜ひべし」等の例あり、「吳」とよみ、「大一」と「第一」の意に用ゐるは當時の慣用にして「浮め」と「浮み」なる丈を「なりたき」と云ひ、「大切なる家」と「大切な家」と云ふが如きは備前地方の方言なるべし。「雷復」を「來復」ならむとおもひ、「生も死も天、地なれば」と「天命」ならんと考ふるが如きは稍々御歌文に通ずる者の懐く所の疑ひなれども、御眞筆に於て明かに「天地」「雷復」を書かれたるのみならず、意味の上に大なる差異あるを以て、容易に傍註をたも加ふるを得ず。故に本書はひたすら原態に違はざらん事を力め、御眞筆

謄寫の際には、八人にて四回の照合を行ひ、印刷の際には、三人にて五回の校正を行ひ、更に印刷出来の後、人を更へて二回の校閲をなし、其結果として漸く左に掲ぐる所の誤植を發見する事を得たり。即ち

頁	行	誤	正
三三	二三	へ住き	住へき
八一	一〇	火 <small>ひ</small> 水 <small>と</small> 月日	火 <small>ひ</small> 水 <small>と</small> 日月
八七	一〇	雪	雲
一六一	五	御尊君様益機嫌	尊君様益御機嫌
一三一	一〇	試	誠
二九六	六	四海太平	四海太平
二九七	五	山本貞次郎	山本貞治郎
三三三	一〇	山本貞次郎	山本貞治郎
三九四	六	成被御座	被成御座
四六三	六	てほ	ては

就中、本文中の誤植は實に八字に過ぎず。以て校正の如何に嚴密なりしかを、知るべく、讀者之によりて、本書が最も御眞筆に近きものなる事を信すべきなり。

尙校閱の後、傍註其他に就いて追加すべきものと改訂したる所左の如し。

頁	行	追加
一一	一三	短冊
一七	三	軸
三三	一三	短冊
三二	八	短冊
三三	九	色紙形奉書
三三	八	短冊形奉書
三四	四	色紙形奉書
三四	八	色紙形奉書

頁、六、	半紙	宛々	の側に	宛々
頁、一、	半紙	協の	の側に	協の
頁、一、	色紙形奉書	侍	の側に	侍
頁、一、	短冊	到	の側に	到
頁、一、	短冊	行	の側に	行
頁、一、	色紙形奉書	未	の側に	未
頁、一、	短冊	候	の側に	候
頁、一、	短冊	當	の側に	當
頁、一、	短冊	會末	の側に	會末

明治四十二年三月二十日印刷
 明治四十二年三月二十五日發行

黑住教本廳藏版

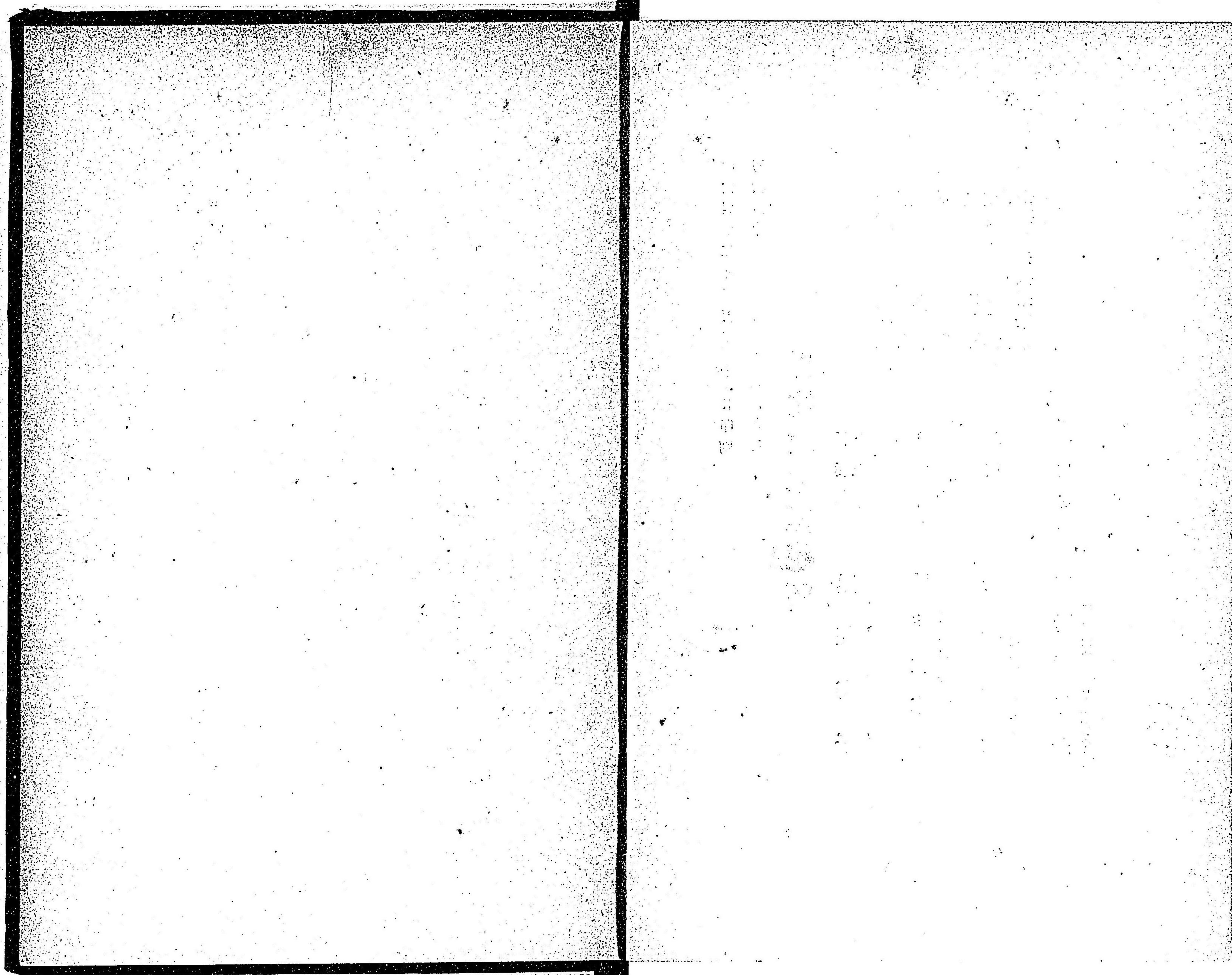
編輯兼發行所 黑住宗子
 岡山縣御津郡今村五十六番地

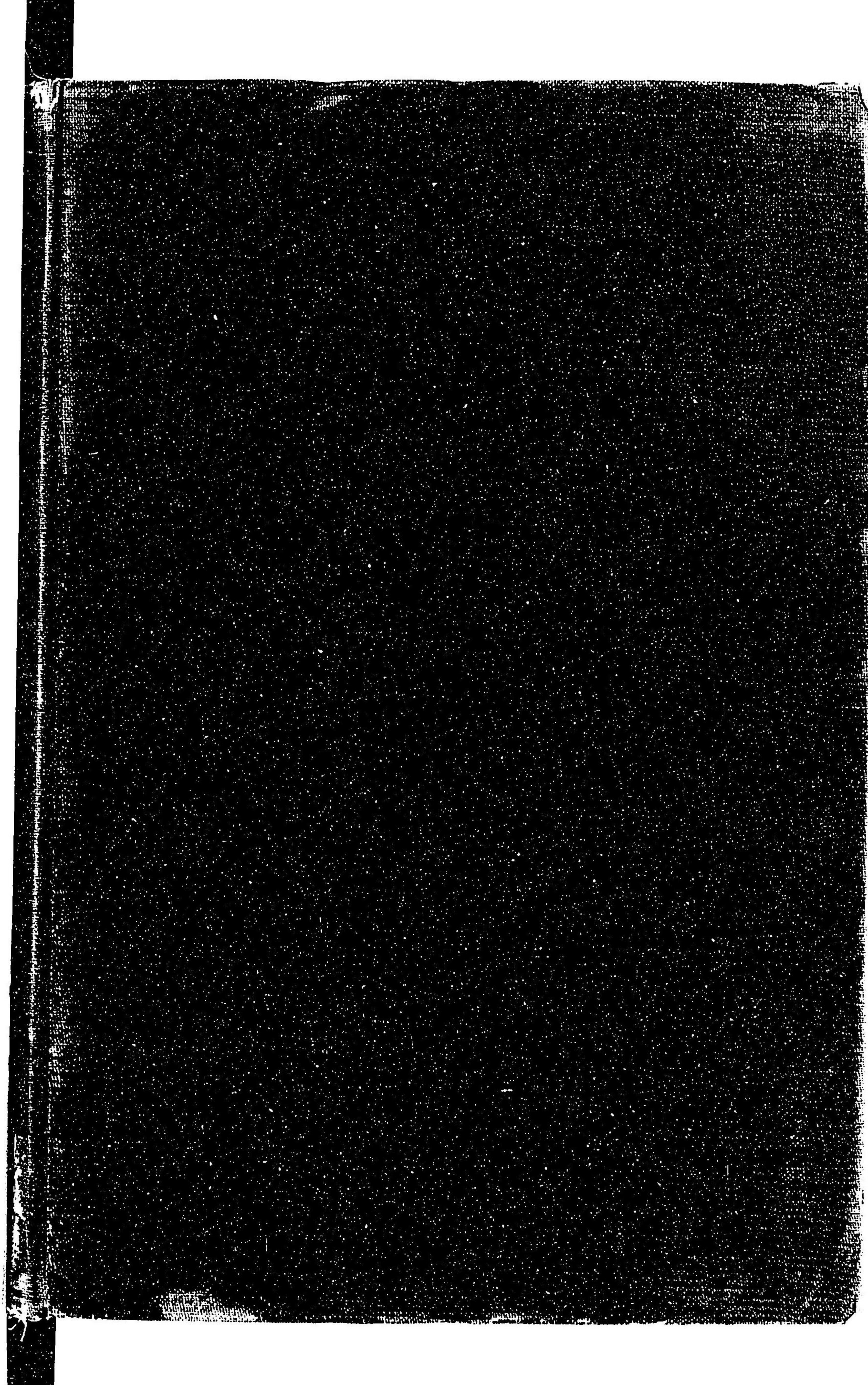
發行所 黑住教本廳
 岡山縣御津郡今村三十五番地

印刷者 安井宇吉
 岡山市船頭町三十七番地

印刷所 山陽新報社
 岡山市西中山下百五十四番地

不許 復製





324

300

013965-000-6

324-300

黒住教教書 第1輯

教祖訓誡七一条並歌集

黒住 宗子 / 編

M42

ABB-0209



知州